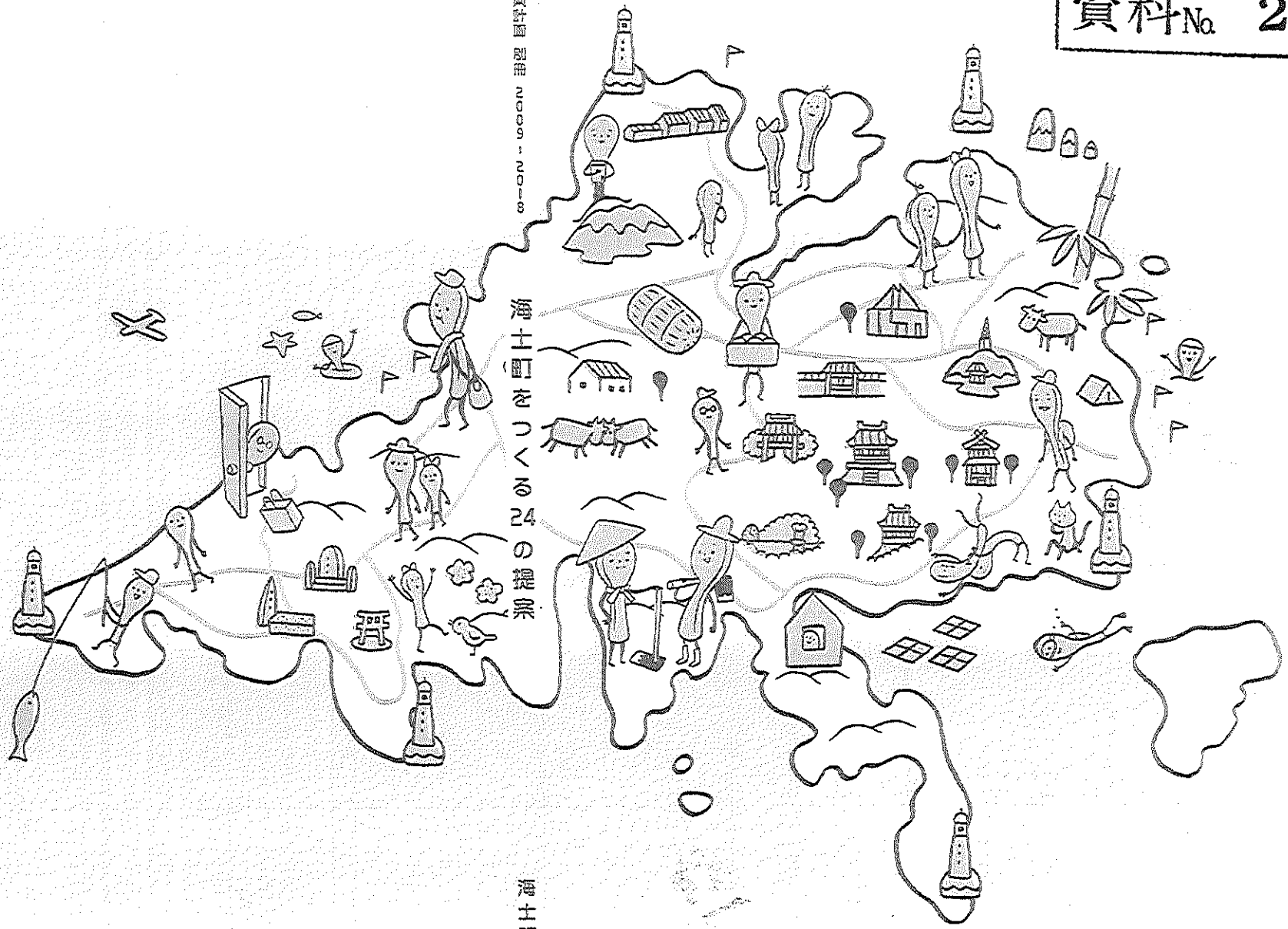
第四次海士町総合振興計画 別冊 2009-2018

海士町をつくる24の提案

資料No. 2



第四次海士町総合振興計画 別冊 2009-2018

海士町をつくる24の提案

海士町

第四次海士町総合振興計画 別冊 2009-2018

海士町をつくる24の提案

第四次海士町総合振興計画 別冊 2009-2018 発行 隠岐島前の森海士町役場

第四次海士町総合振興計画 別冊 2009-2018

海士町をつくる24の提案

町長あいさつ

「島の幸福論」を語り合おう。

平成21年4月から、新たに第四次海士町総合振興計画のもと、海士町のまちづくりがはじまります。前回の第三次海士町総合振興計画では、「キンニャモニャの変」として、人づくり、モノづくり、健康づくりを柱にまちづくりを進めてきました。その結果、島のブランド化や新たな起業家の誕生など、新しい島型ビジネスを生み出すことができました。

こうした成果を踏まえ、さらに海士町のまちづくりを発展させるため、第四次海士町総合振興計画では「島の幸福論」をテーマにかかげました。これは住民の「自分たちの島は自ら築く」という挑戦の意志と一人ひとりが足元から小さな幸福を積み上げ「海士らしい笑顔の追求」をしようという思いが込められています。

今回の総合振興計画策定とその別冊である『海士町をつくる24の提案』の制作には、約50人の住民のみなさんが参加してくれました。これは、海士町40年の歴史上、初めての試みです。島に住む一人として、生活の中で実感する課題は何なのか、それを克服し幸せを実感するにはどうしたらいいのか、議論を重ねて、島を幸福にするアイデアをこの一冊の本にまとめました。

50人の輪が、100人の輪となり、1000人の輪となり、多くの人がまちづくりに挑戦し、「島に生きる幸せ」を実感してくれることを願っています。

2009年4月吉日

海士町長　山内道雄

はじめに

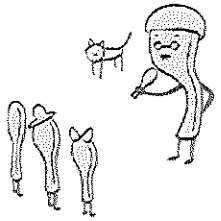
海士町では、10年に一度「総合振興計画」をつくっています。これは今後10年、海士町はどんな町を目指すのか、それを実現させるためにはどうすればいいのか、さまざまな分野にわたって計画を練ったもので、海士町の行政はこの計画に基づいて運営されています。過去には平成元年に「クオリティ・ライフへの出発」、平成11年には「キンニャモニャの変」をテーマとした海士町総合振興計画をつくりました。観光施設などの基盤整備、特産品の開発や地域のブランド化、それらに関わる人材育成など、この総合振興計画による成果は多岐にわたっています。

そして今回、新たにまとめられた第四次海士町総合振興計画のテーマは「島の幸福論」です。これまでの計画を継承しつつ、新たな時代の流れや海士町が抱える課題に対応した、持続可能な島の実現を目指すことに加え、住民一人ひとりの「幸せ」が大きなテーマになっています。海士町に住むことで、いかに幸せを感じられるか——。物質的豊かさと、先の見えない不安が背中合わせの現代だからこそ、これからのまちづくりには「住民の幸せの追求」が重要だと考えました。

住民一人ひとりが「幸せ」を実感できる町、海士町。そのまちづくりの第一歩として、昨年2008年、公募による住民と役場の若手職員を合わせた約50名で構成された「海士町の未来をつくる会」が結成されました。幾たびの話し合いを重ね、総合振興計画の素案を作成。住民の声を反映した第四次海士町総合振興計画を完成させました。さらに今回は、住民が計画づくりに参画するだけでなく、その後のまちづくりにも参画する仕組みを盛り込んでいます。これは海士町初の試みです。

この『海士町をつくる24の提案』は、第四次海士町総合振興計画の住民向けの別冊としてつくられました。住民一人ひとりがまちづくりに参加し、「海士町に住む幸せ」を実現するためにはどうしたらいいのか、そのガイドブックの役割を担っています。

「海士町に住んでよかった」「海士町に住み続けたい」。ひとりでも多くの住民が、そう感じられる海士町にするために、ひとりでもできること、10人でできること、100人でできることなど、人数別にまちづくりのアイデアが提案されています。まちづくりの主人公は住民です。さあ、この本を片手に未来の海士町を一緒につくりましょう。



もくじ

03　町長あいさつ
04　はじめに

08　海士町は素晴らしい！
10　海士町の自慢
12　今、海士町がかかえる問題
16　海士町の未来を描こう
18　まちづくりなんてできないと思っている人へ
20　この本の使い方

22　1人でできること
24　01 歩いて暮らそう
26　02 天職をみつけよう
28　03 海士の味をうけつごう
30　04 もっと水を大切に！
32　05 もったいない市場
34　06 エネルギーを見直そう
36　コラム1

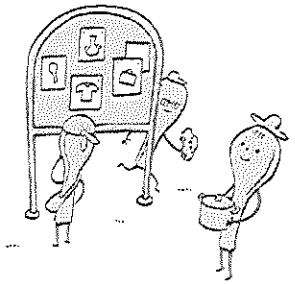
38　10人でできること
40　07 海士人宿につどおう
42　08 ガキ大将を育てよう
44　09 あまさん倶楽部
46　10 海士ワーキングホリデー事業
48　11 ワゴンショップ海士号
50　12 おさそい屋さんになろう
52　コラム2

54　100人でできること
56　13 ちいさな農のある暮らし
58　14 炭焼きクラブ「鎮竹林」
60　15 ＡＭＡ情報局を開局しよう
62　16 欲しいものは島でつくる
64　17 支えあって暮らそう
66　18 地域に「ただいま」を言おう
68　19 里山と里海をつくろう
70　20 みんなで学ぶ島のエコ
72　コラム3

74　1000人でできること
76　21 地域が支える学校づくり
78　22 魅力ある島前高校をつくろう
80　23 海士大学に入学しよう
82　24 海士まちづくり基金

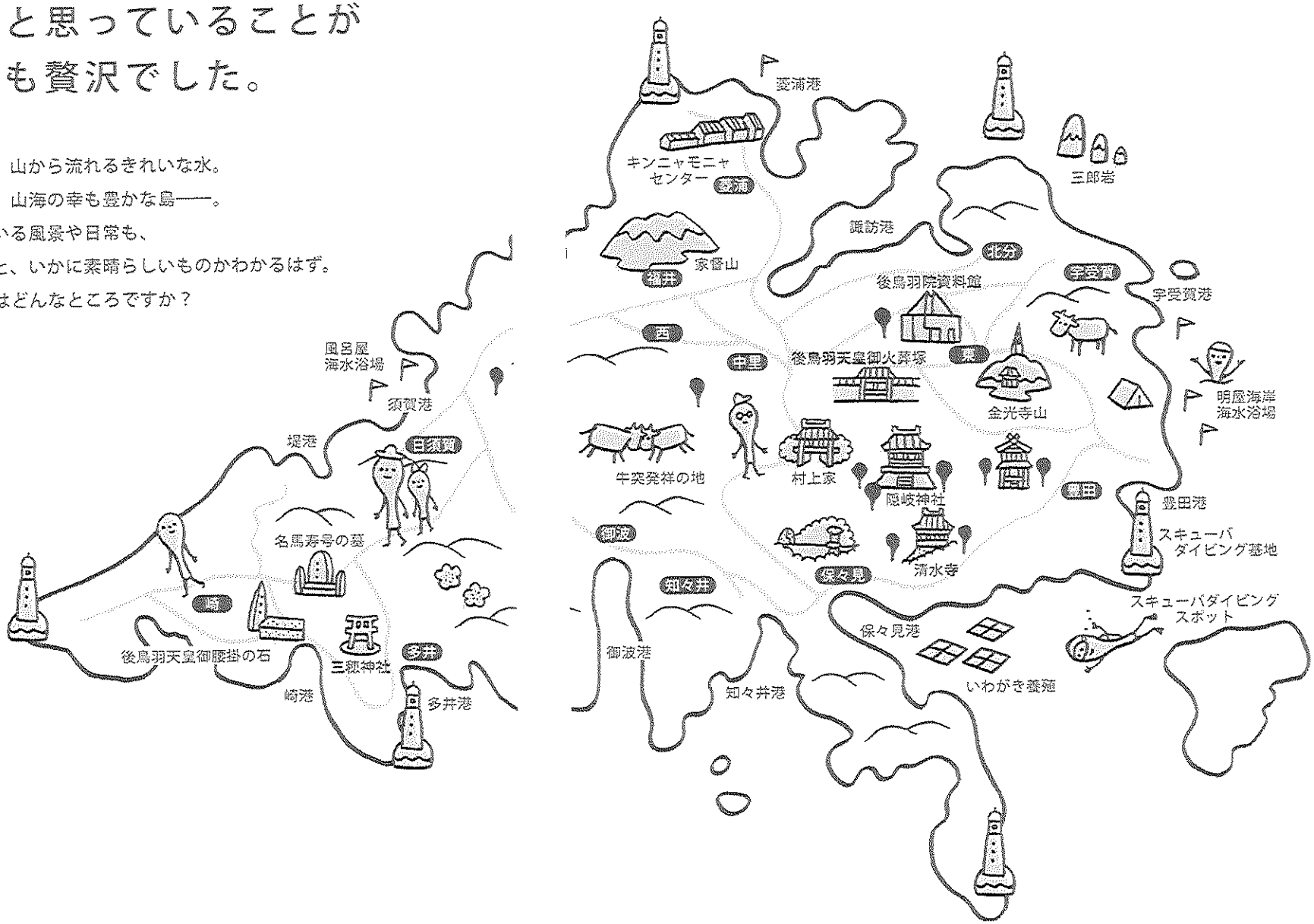
84　提案をかたちにするために
86　役場のリーダーと相談と支援の窓口
88　アイデアをかたちにする５つのステップ
90　海士町総合振興計画本編との対応表
92　この本ができるまで

96　海士町まちづくり提案書



海士町は素晴らしい！
あたりまえと思っていることが
実はとっても贅沢でした。

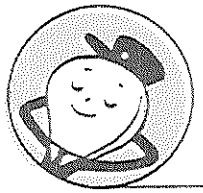
いつも見ている青い海、山から流れるきれいな水。
ご近所さんは顔なじみ、山海の幸も豊かな島――。
あたりまえだと思っている風景や日常も、
あらためて見つめ直すと、いかに素晴らしいものかわかるはず。
あなたの好きな海士町はどんなところですか？



海士町の自慢１

ほぼみんな顔見知り

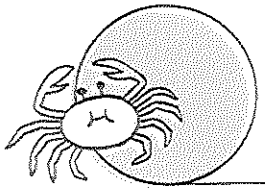
海士町の人口は約2,400人。顔を見ただけで、どこの子どもなのか、両親はどんな人なのか、どんな仕事をしているのかなど、なんでもわかってしまいます。また、海士町に住みはじめてまだ間もない人のことも、みんなとても興味を持って見ています。早く海士町に馴染むためには、区会へ入ったり、地域や町内の清掃活動に参加すれば、すぐにみんな顔見知りになります。



海士町の自慢２

犯罪がない

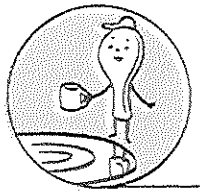
海士町では、家に鍵をかけると「何かあったときにどうすっだ！」と怒られます。みんな顔見知りだからこそ、鍵をかけないほうが便利なことがたくさんあります。雨が降ったときの洗濯物、おすそ分け、宅配便の受け取りなど、近所との密なお付き合いによって便利で安全な暮らしができるのです。



海士町の自慢３

家にカニが来る

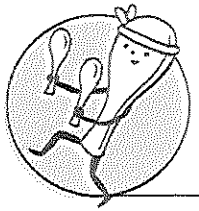
海士町には、アカテガニという小さなカニがたくさん住んでいます。このカニは、少ない水で生きていけること、高いところに上る習性があることから、川沿いの家や海沿いの家の中によく入ってきます。満月になるとアカテガニが大群で海に向かう様子を見ることもできます。小さなお客様の訪問に、豊かな自然と共に暮らしていることを実感できます。



海士町の自慢４

島なのに水が豊富

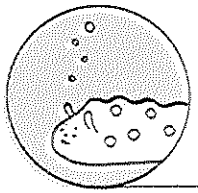
一般的に離島は水の確保に苦労していますが、海士町は昔から水が豊富で水の確保に苦労しませんでした。保々見にある「天川の水」は、環境省指定の名水百選にも選ばれており、その水量は一日400トンにもなるそう。水が豊かなので稲作も盛んです。米の島内自給率は120パーセントを越えており、海士の米は、隣の西ノ島町や知夫村などでも食べられています。



海士町の自慢５

若者が民謡を歌い踊れる

海士町には「キンニャモニャ」という隠岐民謡があります。「キンニャモニャ」は、しゃもじをもって、三味線の音にあわせて踊ります。キンニャモニャ祭では、小さな子どもからお年寄りまで全員が踊ることができます。また、ほとんどの若者もこの民謡を歌ったり、踊ったりすることができます。宴会などは、必ずこの踊りでしめます。



海士町の自慢６

ウミウシは食材

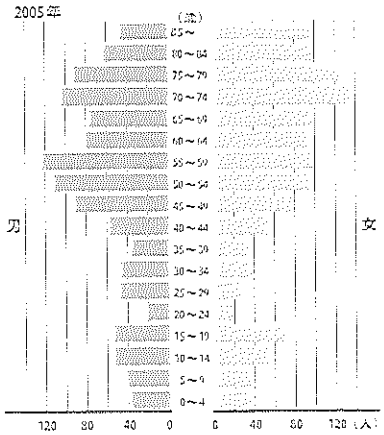
海士町や隠岐では、ウミウシ（ベコ）を食べる習慣があります。ウミウシとは、軟体動物で貝の消失した生物の総称で、ゆでてもみ洗いし、煮つけにしたり、酢の物にして食べます。煮つけは、弾力があり、旨味も感じられます。酢の物は、やわらかい食感で味はほとんどありません。ウミウシを食べようという先人は勇気がありました。

今、海士町がかかえる問題。

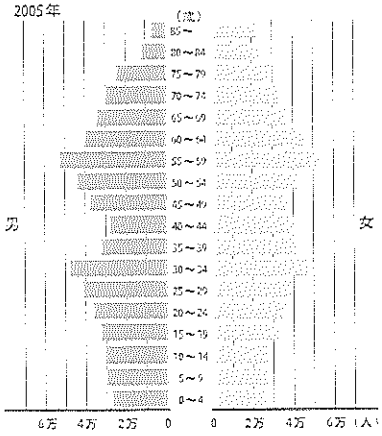
1 人口減少。とりわけ20〜30代の若者の減少は、島の死活問題です。

2004年、日本の人口は1億2,783万人をピークに減りはじめました。2050年には、1億59万人まで減るといわれ(*1)、この速度は、他の先進国でも体験したことのないものだそうです。海士町でも、これを上回る速度で人口減少が進んでいます。現在の海士町の人口は約2,400人(2008年)ですが、2030年には約1,300人と、今後20年余りで現在の約半分にまで減少すると予想されています。特に就業機会の少ない離島である海士町では、20〜30代の若者の人口流出が激しく、他の地域に比べても、この年齢層の人口減少が進んでいます。この年齢層は、島の経済を担い、子どもを生み育てる人たちです。若者にとっても住み続けられ、住みたくなる島とはどんな島なのでしょうか。想像してみてください。

海士町の人口構成



日本の人口構成



出典：国立社会保障・人口問題研究所

2 少子高齢化。海士町の5人に2人が65歳以上の高齢者です。

海士町の高齢化率(65歳以上の高齢者の割合)は2008年で39.4%となりました。全国平均が22%ですから、非常に高齢化が進んだまちといえます。一方、出生率はというと、人口1,000人あたり2006年に2.7人と全国平均8.8人を大きく下回っています。少子高齢化と一言でいってしまえばそれまでですが、海士町の14の集落のうち、4集落の高齢化率が50%を超えており、このままでは集落そのものの維持に影響を及ぼす可能性があります。大勢のお年寄りを支えるだけの人手もお金もないとき、どうすればいいか。それでもお年寄りが幸せな暮らしをするためには、どうすればいいのか。今、考える必要があります。

3 大量生産・大量消費・大量廃棄の社会はもう限界です。

日本を含めた先進国の産業は、大量生産・大量消費のシステムによって成長してきました。生活必需品が不足していた時代には、大量生産はモノを安く多くの人に行き渡らせる有効なシステムでした。しかし、それを続けた結果、大量のゴミを生み出し、大量の資源を浪費しつづける社会になってしまいました。こうした大量生産を支えてきた安い石油も、世界での需要が供給を上回る「ピークオイル」(*2)によって、今までのようには使えなくなるといわれています。値段は上がり、輸入量も激減するかもしれませんし、いつの日か、枯渇する日もやってきます。こうした地下資源や森林などの自然資源を消費し、廃棄する一方通行の産業構造は、もはや限界にきているのです。

そこで、注目したいのが、限りある資源を守り、育てながら有効に活用する循環型の産業です。ありがたいことに海士町には海や山、たくさんの自然資源が残されています。この環境の中でこそできる産業とはどんなものでしょう？新たな産業のあり方が求められています。

4 地球温暖化問題。海士町の暮らしも世界に影響しています。

ここ数年でよく耳にするようになった「地球温暖化問題」。この問題も海士町と無縁ではありません。地球温暖化問題とは、化石燃料（石油や石炭など）を大量に消費することで、大気中に二酸化炭素などの温室効果ガスが増え、気温が上がり、自然環境や人類の生活に破壊的な影響を与えるというものです。この地球温暖化を防ぐには、二酸化炭素などの排出を減らしていく必要があります。

二酸化炭素は、暮らしのさまざまな場面で排出されています。例えば、車に乗ったり、ゴミを焼却したりすることも、二酸化炭素の排出源になります。また遠い国からの輸入も、輸送するときにたくさんの二酸化炭素を排出しています。こうした視点から考えると、島でとれたものを島で消費する「地産地消」は、二酸化炭素排出を減らすことに一役かってくれる活動にもなります。私たち一人ひとりが、地球全体の環境問題を意識した暮らしを考える時代になったのです。

5 山・海・人はつながっています。人手不足と無関心が引き起こす環境問題。

海士町でも間伐などの手入れの行き届かない山林や、休耕地（使われていない田畑）などが、年々増えています。農業や林業にたずさわる人の高齢化で手に負えなくなったり、手間がかかる割には収入に結びつかないなどが理由です。

荒廃地の増加は、単なる山や畑の問題に留まりません。間伐が行われない山では、充分な光を得ることができず、ヒョロヒョロと細く弱い木しか育ちません。弱い木はしっかり根を張ることができず、倒れてしまいます。こうした山林は、土砂崩れを起こしやすく、さらにはその土砂が海をにごらせてしまうことにもつながります。そうなれば、海の魚にも影響し、漁業も打撃を受ける可能性があります。また同様に、私たちの生活排水も土壌や川、海を汚す原因になっています。

海や山、人の暮らしはすべてがつながっています。この美しい自然こそが最大の資源である海士町だからこそ、そこから恵みをいただくには、手入れをし、大切に保護していく必要があるのです。

6 行政主導のまちづくりは限界です。

今までまちづくりは、行政が主導して計画を練り、運営をしてきました。しかし、社会が成熟し、海士町に住む私たちの暮らしも多様化しています。少子高齢化や地球環境問題など、今までにない問題もでてきました。こうした状況にきめ細やかに対応するには、いままでの行政主導の力だけでは充分とはいえません。また、昨今の財政状況の悪化など、地方自治体を取り巻く環境は厳しいのが現状です。

そこで、必要となってくるのが、住民の力です。物質的な豊かさだけでなく、心の豊かさが重視される今、さまざまな学び方や働き方、趣味や夢、生きがいなどが追求できる社会が求められています。そのためにも、住民の一人ひとりが新しいまちづくりの方法を知り、参加することが不可欠なのです。ずっと住み続けたい海士町とはどんなものでしょうか、それを実現させるためにはどうしたらいいでしょうか。すべての住民の協力が必要です。

＊1　国立社会保障・人口問題研究所しらべ。
＊2　ピークオイル：石油などの化石燃料の生産が、21世紀の中頃までにピーク（頂点）を迎え、その後は減衰していくという考え方。IEA（国際エネルギー機関）は、在来型の石油生産量は、標準的なシナリオでは2028年から2032年にピークを迎えるとしているが、悲観的な見方では2013年から2017年にピークが来るとしている。

海士町の未来を描こう。

今回まとめられた第四次総合振興計画のテーマは、「島の幸福論」です。海士町は、今後10年をかけて、島ならではの幸せを追求し、住民一人ひとりが幸福を実現できる社会を目指すことを決めました。

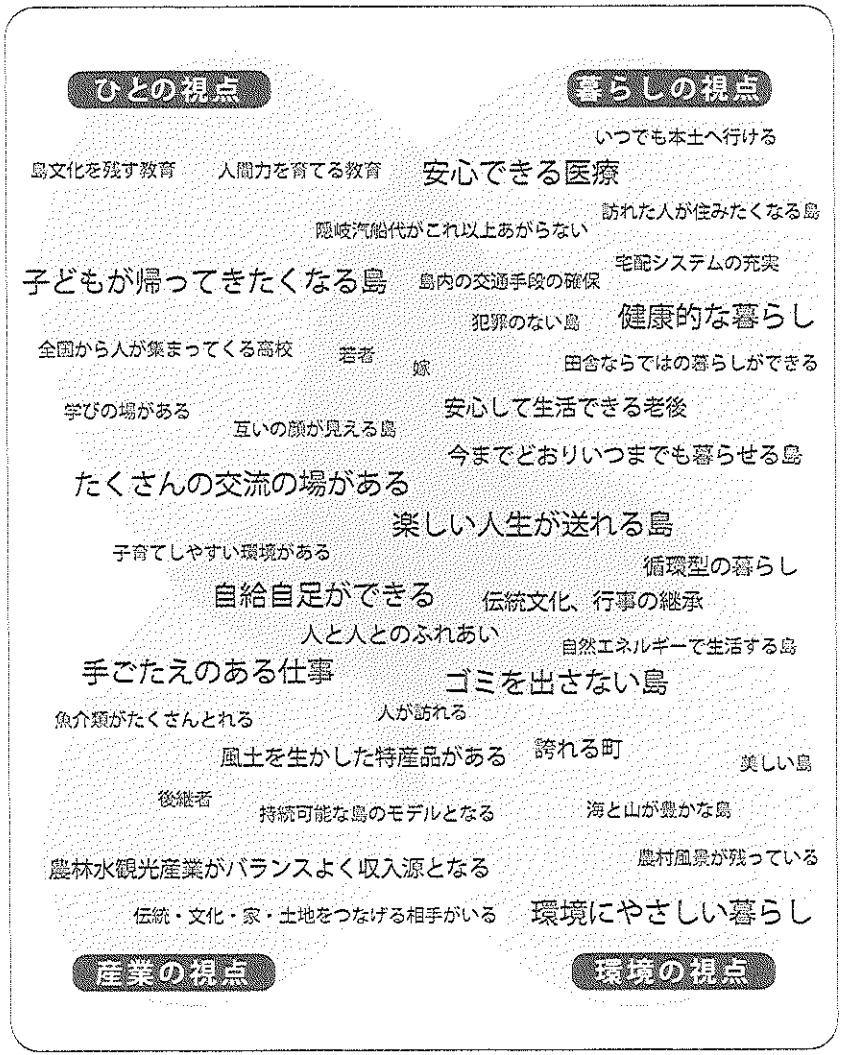
では、島に生きる私たちにとっての「幸せ」とはなんでしょうか？

第四次総合振興計画をつくるにあたって、「海士町の未来をつくる会」を結成し、多数の住民が海士町の将来について語り合いました。

その結果、私たち海士町の住民は、今や都市では手に入れることができなくなった、多くのことを大切にしていることに気づきました。

海士町に住んでいるからこそ生まれてくる笑顔、海士町に住んでいるから感じられる幸福とはどんなものでしょう。まずは私たち一人ひとりが、海士町に住む幸福について考えることが必要です。そしてさらに、海士町の住民どうしが一緒に、幸せを感じあえる、分けあえる町にするにはどうしたらいいか考えることも必要です。海士町にはさまざまな課題があります。その課題をどう解決していくのかも考えなくてはいけません。一緒に知恵を出し、一緒に汗をかいて、一緒に笑いながら、よりよい明日をつくっていく。それこそが、まちづくりの本来の姿なのです。

住民の声



海士町の未来を考える会（第四次海士町総合振興計画の策定に関する住民説明会より）

まちづくりなんて
できないと思っている人へ。

問 まちづくりは行政の仕事でしょ？

答 海士町のかかえる問題でも紹介しましたが、行政だけでまちづくりをすることは困難になってきました。海士町の税収は年々減っています。役所の職員も減っています。一方で、高齢者が増え、現場で活躍してくれるはずの若者は減っています。多種多様になった住民のニーズに応え、みんなが快適に暮らしていくには、支えあいの精神のもと、住民がまちづくりに参加することが不可欠です。

問 まちづくりができるような資格や能力がありません。

答 まちづくりに参加するのに、何か資格や特別な能力は必要ありません。どんな人でも好きなこと、得意なことがあるはずです。まずは自分が興味のある分野に参加することをおすすめします。またこの本では、ひとりからはじめられるまちづくりのアイデアも提案しています。

問 まちづくりなんて一部の人だけのものなんじゃない？

答 現在、海士町のまちづくりに参加している人は、約50人います。この50人が、7人の人に声をかければ350人。さらに350人の人が7人に声をかければ、ほぼ全員の住民がまちづくりに参加することになります。まちづくりに参加することで、参加しないよりも、海士町での暮らしが楽しくなるはずです。

問 活動資金はどうするのですか？

答 今回提案されているまちづくりのアイデアの実現には、行政も一緒に活動し、金銭的支援も行っていくことになっています。また今後、あらたなまちづくりの活動を支援していくために、「海士町まちづくり基金（仮）」の設立を予定しています。

問 幸せってみんなそれぞれ違うんじゃないですか？

答 個人の幸福感はひとそれぞれ違うかもしれません。今回、海士町が目指すのは「海士ならではの笑顔の追求」です。この島で生きてゆく上で、どうしたら多くの人が「幸せ」を感じられるかを考えていきたいと思っています。そのためにも今後、住民への「幸福度調査」を定期的に行いたいと考えています。

この本の使い方。

この本では、海士町のさまざまな課題の解決と住民の幸せの追求を目指し、まちづくりのアイデアを提案しています。ひとつひとつのアイデアは、「海士町の未来をつくる会」による24回の話し合いから出てきたものです。ひとりで簡単にできそうなことから、家族や友達とできそうなこと、地域でできること、海士町全体でできることを紹介しています。まずはこの本を眺めて、海士町の未来について話題にしてください。そして、あなたのできることは何か考えてみてください。

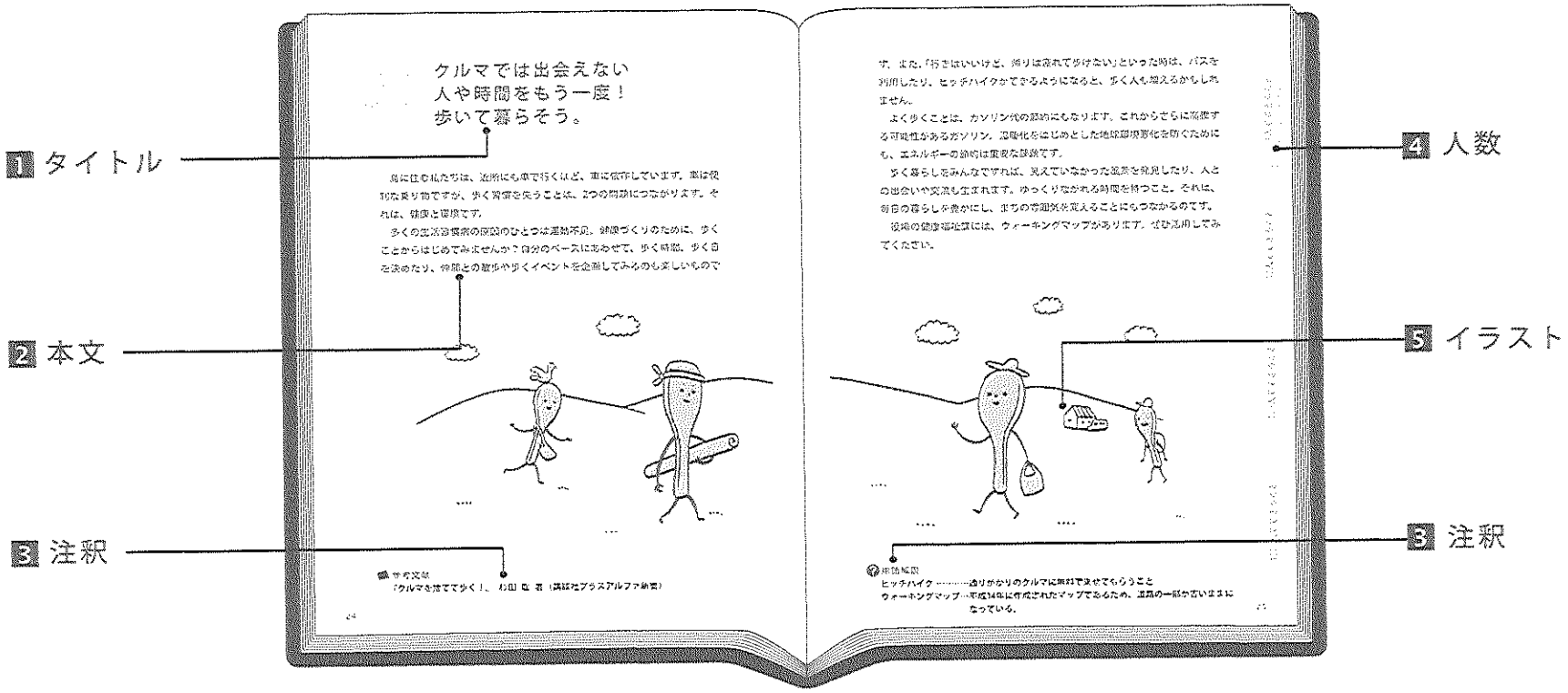
1 タイトル ― みんなではじめたいまちづくりの提案です。

2 本文 ――― どうしてこんな提案が生まれたのかその背景と、やってみるとどんな効果があるのかを説明しています。

3 注釈 ――― 提案の理解を深めるのに役に立つ本や資料の紹介、わかりにくい言葉を説明しています。

4 人数 ――― 何人からはじめられるかがわかります。

5 イラスト ― 海士町の未来をイメージできます。



第四次海士町総合振興計画 島の幸福論-海士ならではの笑顔の追及ーについて

第四次海士町総合振興計画の策定においては、海士町の未来をつくる会の開催などによって、多数の住民が海士町の将来について語り合いました。その結果、私たちは、今や都市部では手に入れることができなくなった多くのことを大切にしたいと気づきました。海士町では、豊かな自然と調和した美しい風景、深い歴史を受け継ぐ地域文化、助け合いの精神がある地域社会、確かな技を持ち顔の見える仕事、新鮮で安全な食べ物、ゆったりとした時間や空間などを大切にしていきたいと考えています。
テーマである「島の幸福論」は、島だからこそ大切にしたいことを、住民一人ひとりが認識し、その実現のために行動を起こしていくことを表しています。また第三次海士町総合振興計画のテーマであった「キンニャモニャの変」で変革を起こした後は、「島の幸福論」として筋道立てて考え実行していくという意味も込められています。
サブタイトルである「海士ならではの笑顔の追求」は、海士町に住んでいるからこそ生まれてくる笑顔を大切にすること、笑顔が生まれた理由を見つけ出して広げることなどを表しています。
海士町は、今後10 年かけて島ならではの幸せを追求し、住民一人ひとりが幸福を実感できる社会を目指します。

第四次海士町総合振興計画 別冊 海士町をつくる24の提案

第四次海士町総合振興計画においては、行政施策の指針としての本計画書に加え、住民一人ひとりが主体的にまちづくりに関わるための「第四次海士町総合振興計画 別冊 海士町をつくる24 の提案」をまとめています。住民提案集では、未来をつくる会の「ひと」「産業」「暮らし」「環境」の4 つの視点から、海士町の生活者の視点からの課題を解決するための24 の「まちづくり具体案」が述べられています。各具体案は、1 人でできることから10 人、100 人、さらには1000 人の力を合わせてできることに分けて示しながら「みんなでまちづくりに取り組みましょう」と呼びかけています。物質的な豊かさと先の見えない不安が背中合わせの時代だからこそ、これからのまちづくりには「住民の幸せの追求」が重要だと考えました。住民一人ひとりがまちづくりに参加し「海士町に住む幸せ」を実現するためにはどうしたらいいのか、この本はそのガイドブックの役割を担っています。

人工

一人の発芽で

個人の発芽でまくにはじめるまちづくり

クルマでは出会えない人や時間をもう一度！歩いて暮らそう。

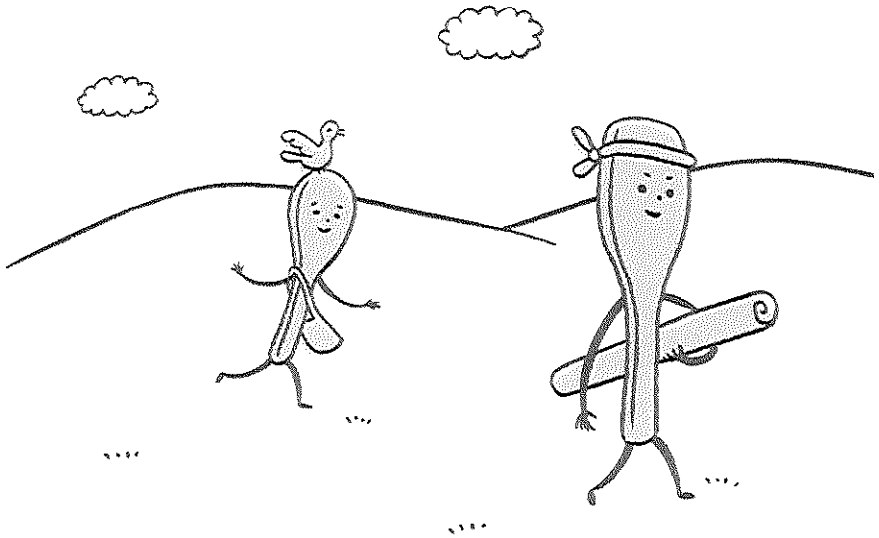
島に住む私たちは、近所にも車で行くほど、車に依存しています。車は便利な乗り物ですが、歩く習慣を失うことは、2つの問題につながります。それは、健康と環境です。

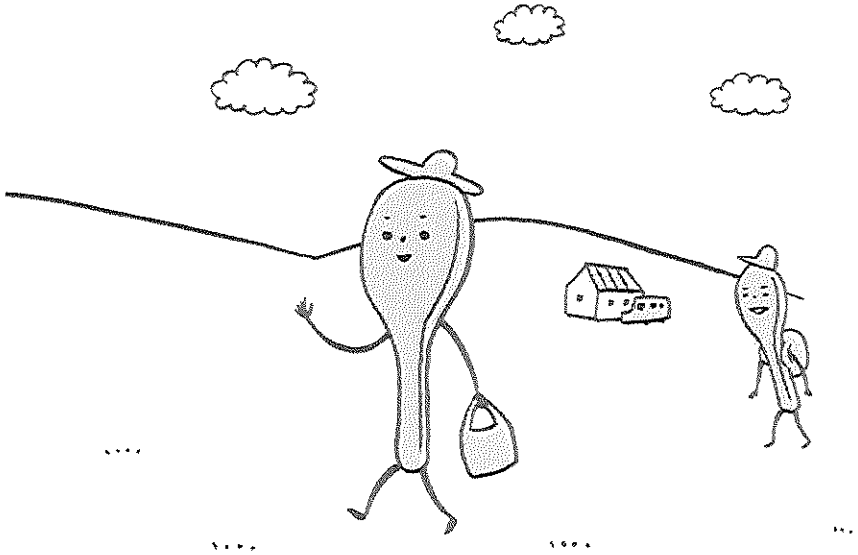
多くの生活習慣病の原因のひとつは運動不足。健康づくりのために、歩くことからはじめてみませんか？自分のペースにあわせて、歩く時間、歩く日を決めたり、仲間との散歩や歩くイベントを企画してみるのも楽しいものです。また、「行きはいいけど、帰りは疲れて歩けない」といった時は、バスを利用したり、ヒッチハイクができるようになると、歩く人も増えるかもしれません。

よく歩くことは、ガソリン代の節約にもなります。これからさらに高騰する可能性があるガソリン。温暖化をはじめとした地球環境悪化を防ぐためにも、エネルギーの節約は重要な課題です。

歩く暮らしをみんなですれば、見えていなかった風景を発見したり、人との出会いや交流も生まれます。ゆっくり流れる時間を持つこと。それは、毎日の暮らしを豊かにし、まちの雰囲気を変えることにもつながるのです。

役場の健康福祉課には、ウォーキングマップがあります。ぜひ活用してみてください。





参考文献
『クルマを捨てて歩く！』 杉田 聡 著（講談社プラスアルファ新書）

用語解説
ヒッチハイク……通りがかりのクルマに無料で乗せてもらうこと
ウォーキングマップ…平成14年に作成されたマップであるため、道路の一部が古いままになっている。

02 あなたの才能を待っている人がいます天職をみつけよう。

海士町は、仕事を見つけることが難しい町です。しかし一方で、小さな仕事の要望はたくさんあります。特に今後高齢者介護や教育に関する要望が高まると予想されています。小さな仕事ですから、ひとつの仕事だけで生計を立てるのは難しいかもしれません。しかし、いくつかを組み合わせることで、ずっとこの島で仕事し、暮らし続けることも不可能ではないのです。

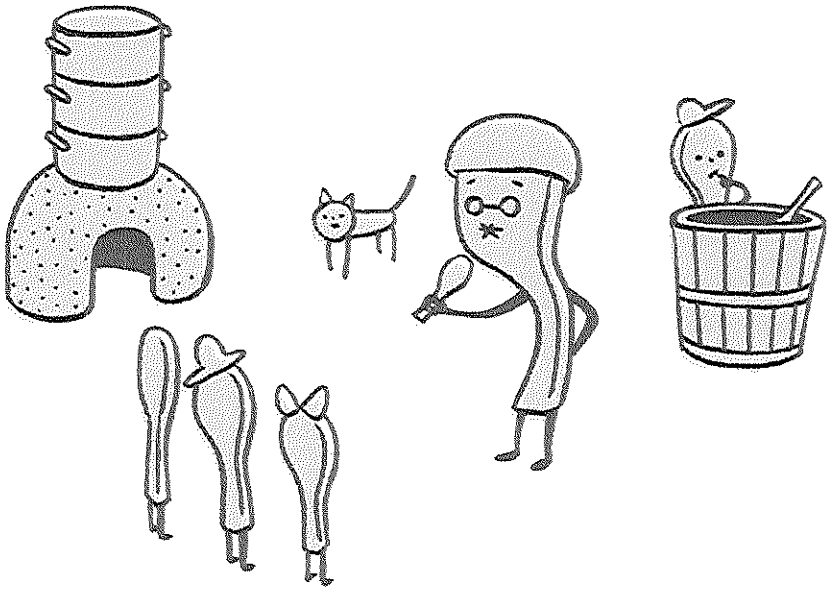
「半農半X(エックス)」という言葉があります。これは、「持続可能な農ある暮らしをしつつ、天の才を社会のために生かし、天職(X)を行う生き方、暮らし方」を意味します。幸いにも海士町は、豊かな海に囲まれ、稲作も畑づくりもできる土地が身近にあります。こうしたちいさな農を暮らしに取り入れることで、食費の一部を補い、残りを他の仕事でまかなうという暮らし方ができます。それは半々じゃなくても、2農8X(エックス)でもいいのです。

天職(X)とは、その人の個性や能力、技能を発揮した仕事を意味します。天職を見つけるために、講座を聞きに行ったり、仕事の本を貸し借りしたりするのもいいでしょう。人は誰かの役に立てたとき、幸せを感じる生き物です。天職を発掘して、農的な暮らしとあわせることで、島での生計を立てると同時に、まちのお役にたてる。そんな暮らし方が求められています。

参考文献
『半農半X(エックス)という生き方』 塩見 直紀 著（ソニーマガジンズ新書）

1人でできること
10人でできること
100人でできること
1000人でできること

03 おばあちゃんの知恵と海士の味をうけつごう。



「こじょうゆ」を知っていますか？こじょうゆは海士独自のなめ味噌で、醤油が簡単に手に入らなかった時代に、島の人があみだした島独特の調味料。まさに海士の食文化の象徴といえる味です。

今、こうした海士の郷土料理や味が消えようとしています。つくり方を知っている人の高齢化が進んでいることから、その継承は急がなくてはなりません。

海士の郷土料理には、島に生きた昔の人の知恵がぎっしり詰まっています。旬の時期に大量に取れたものを保存したり、時間がたってもおいしくいただける方法など、今でも充分に役立つものがあります。特に保存食は、いざというときの非常食にもなります。災害時、本土からの食糧物資が途絶えたとき、命を救ってくれるかもしれません。

海士の味には、きちんとしたレシピがないことが多く、代々、目分量と舌、そして方言で受け継がれてきました。つまり、一人ひとりの目で、舌で、耳で、海士の味とおばあちゃんの知恵を受け継がなくてはいけないのです。こうした交流は、教えるおばあちゃんたちにもやりがいを与えてくれます。単なる味の伝承を超え、方言や文化の伝承、そして海士に生きる人の「こころ」を伝えることにもつながります。

おばあちゃんの料理教室を開いてみませんか？　もっとも身近にある「海士の味」の可能性を大切にしてみてください。

参考文献

『隠岐の食綴り』 島根県発行

『フードクライシス 食が危ない!』 金丸 弘美 著（ディスカヴァー・トゥエンティワン）

『日本FOOD紀』 古田 ゆかり、服部 幸應 著（ダイヤモンド社）

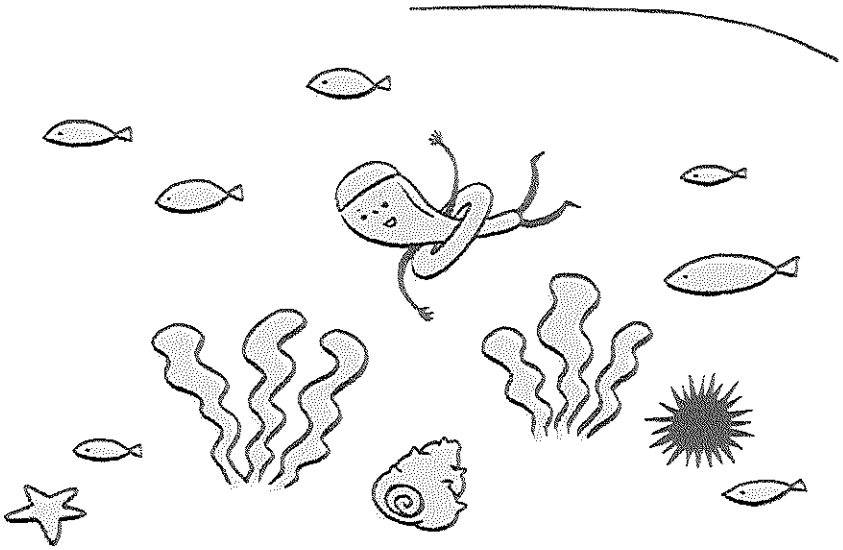
下水道の整備率90.8%
接続率49.5%
もっと水を大切に！

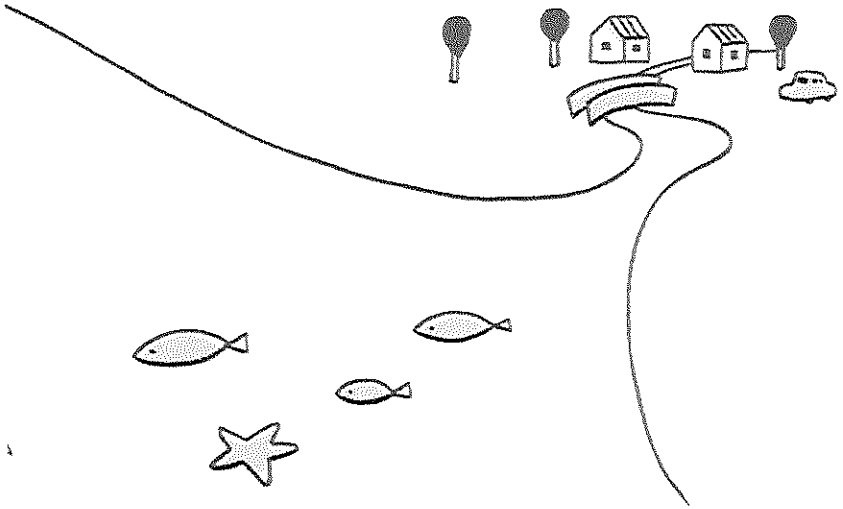
海に囲まれた小さな島である海士町は、昔から海の恵みで生きてきました。今でも漁業は島の主要産業のひとつであり、海とは切っても切れない関係にあります。しかし、ここにびっくりするデータがあります。海士町の下水道の整備率は90%を超えるにも関わらず、接続率は50%に満たない。つまり、半数近くの世帯が生活排水をそのまま川や海、土壌に流しているということです。

環境への意識。昔はそんなこと意識しなかったかもしれません。合成洗剤なんてありませんでしたし、生活雑貨のほとんどは自然素材からできていたので、ポイっと捨てても自然に還ることができました。そんな習慣の記憶と豊かな自然があるがゆえに、かえって環境への意識が薄くなるのかもしれません。しかし、川に入った生活排水は、必ず海に流れ込みます。そこは、漁業をいとなむ人たちの大切な仕事場であり、私たちの食卓にあがる魚やサザエ、アワビなどの住みかでもあるのです。

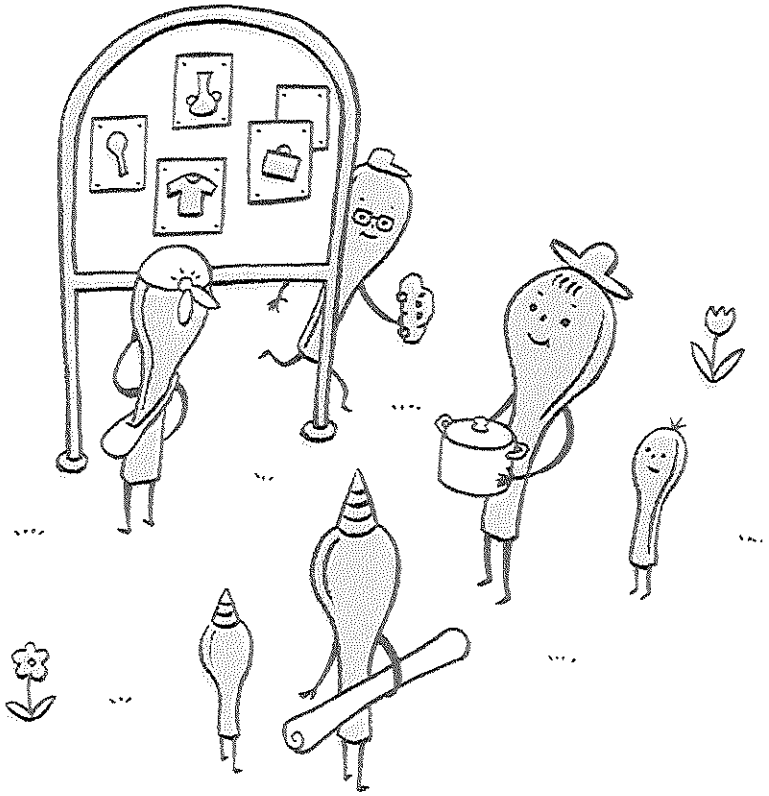
まずは、生活排水は下水管へ流しましょう。次に、自然分解されやすい洗剤やシャンプーの情報や節水のアイデアをみんなで交換してみてもいいでしょう。また、海士町は水が豊かだといわれていますが、水源や湧水量はいまだにわかっていません。水のはじまりからおわりまでを調べることも必要です。

水は限り有る資源。森も畑も人も動物も、島の水をわけあって生きています。その水を汚すことなく大切に使う。排水口は海の入り口、食と仕事につながっていることを意識してみてください。





05 あなたのゴミは、わたしの宝。もったいない市場に参加しよう。



大量生産社会のしわ寄せ、ゴミ問題。海士町も他人事ではありません。現在活躍してくれている清掃センターと最終処分場の耐用年数が徐々に迫ってきているのです。清掃センターはあと約15年、最終処分場はあと約10年で再建する必要があるといわれています。再建にかかる費用はもちろん税金です。それを町民一人あたりに換算すると、清掃センターは一人当たり32万円（総額8億円）、最終処分場は一人当たり20万円（総額5億円）の負担になります（補助金が入らない時の負担額）。こうした施設をできるかぎり長く使う方法は、処理するゴミを減らすことがいちばんです。

ゴミの中にはまだまだ使えるものがたくさんあります。そんな、使えるけどいらないものを「もったいない市場」に出品してみませんか？もったいない市場は、だれかの「ほしい」と「いらない」をつなぐ架け橋。みんながよく集まる場所の掲示板を通して、または、清掃センター内に「再利用コーナー」を設置することで、ゴミにしないモノの循環を生みだすことができます。農業や漁業で使う道具の出品は、新規参入したい若者にとっては願ってもない宝。もったいない市場を通して、さまざまな交流が生まれる可能性もあるのです。あなたのゴミは私の宝ですから。

参考文献

『廃棄の文化誌 新装版―ゴミと資源のあいだ』 ケヴィン・リンチ 著（工作舎）

参考事例

NPO法人住まいみまもりたい（大阪府大東市）

NPO法人ゼロウェイストアカデミー（徳島県上勝町）

用語解説

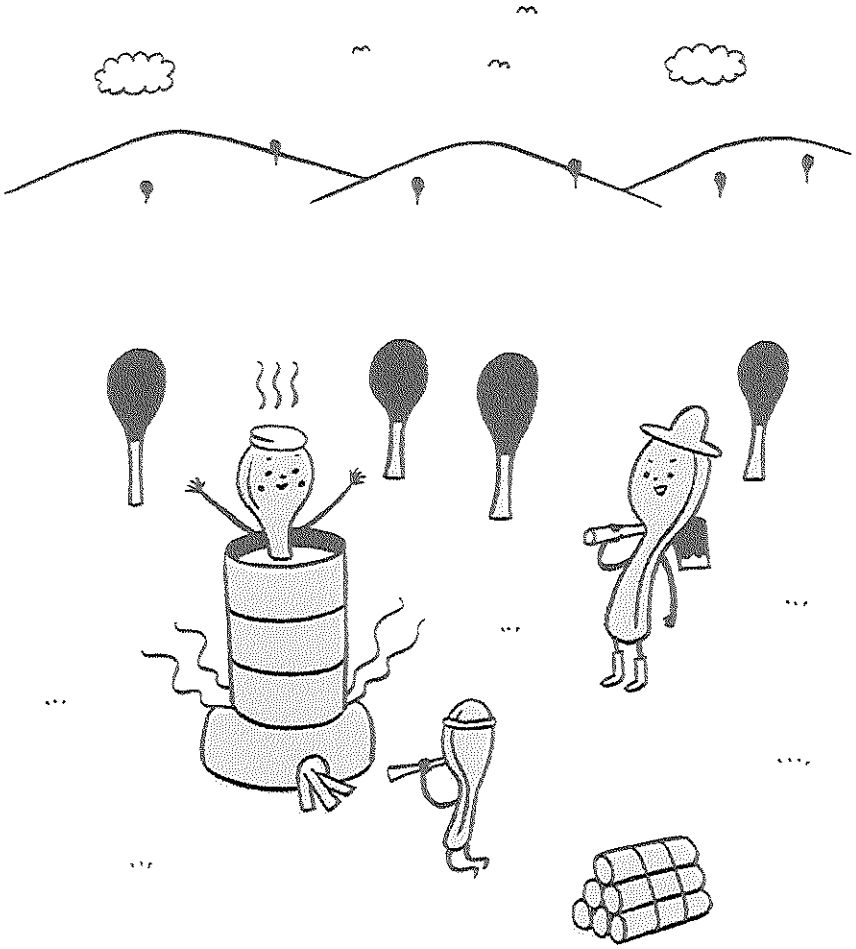
最終処分場…清掃センターの焼却場で出た灰を埋めたり、不燃ごみを埋め立てたりしている処分する場所。

化石燃料から
自然エネルギーへ。
島のエネルギーを見直そう。

巻頭の「海士町がかかえる問題」でも紹介しましたが、遠くない将来「ピーク・オイル」(⇒p15)がやってくる可能性が指摘されています。これは、世界中の石油の需要が供給を上回り、現在使っているような安い石油が、簡単に手に入らなくなる可能性をも意味しています。地球温暖化の観点からも化石燃料の使用を減らしたい今、石油に代わる自然エネルギーの積極的な利用が求められています。

自然エネルギーというと、風力発電や水力発電などを思い浮かべますが、島にはもっと身近なエネルギーがあります。それは薪と炭。おじいさんやおばあさんが子どものころまでは、立派に主役級のエネルギーだったものです。例えば、冬の暖房に薪ストーブを導入してみる。パチパチゆらゆらと燃える炎は、人のこころを癒し、気づけば家族も集まってきます。五右衛門風呂を復活させて薪でお風呂に入るのもいいでしょう。また、炭を使えば七輪で魚が焼けたり、土鍋や羽釜でごはんも炊けます。

本土よりもすでに20円/1ℓほど高い海士町のガソリン代。これに輪をかけて価格が乱高下しては、産業も暮らしも石油に振り回されてばかりです。こうしたリスクを回避するためにも、今から自然エネルギーへの移行を考えてみたいものです。



コラム 1

「今週末、子どもを預かっていただけますか？」甘える勇気からはじまる、地域の絆。

Iターンで海士町に住むようになってから6年。夫婦共働きで2人の子どもを育てているSさんにとって、保育園が休みの日は、ちょっとした悩みのタネだったという。シーズンともなれば、土日も関係なく仕事に忙しい二人にとって、子どもの面倒を誰に見てもらうかを考えなければいけないからだ。

子育て経験のある方なら想像に難くないとは思うが、ちいさな子どもの面倒は、仕事の片手間にできることではない。出産直後は、島外に住むご両親に来てもらったこともあるそうだが、それもずーっとというわけにもいかず……。

「甘えてみることにしたんです」

そう、Sさん夫妻が選んだ解決策は、知り合いのご近所さんの「何か困ったことあったら言ってね」という言葉に「甘える」ことだった。以前から、子どもを親の価値観の中だけで育てるよりも、おじいちゃん、おばあちゃん、近所の人などさまざまな人とふれあう中で学ぶことが大切だと感じていたSさん。「知っている人に預かってもらえるなら、こちらも安心ですから」と周りの好意をありがたく受け取ることにしたのだ。今では、2軒の家庭でかわるがわるに面倒を見てもらっているという。

「預けた最初の日、子どもを引き取りに行ったら、『次はいつ来るの？』って言ってもらえたんですよ。そのとき、『ああ、また頼んでいいんだ』って。本当にありがたかったです。これが『じゃあ、またね』だったら、もう一度頼むことに躊躇（ちゅうちょ）していたかもしれませんね」

Sさんと預け先の家の間には、金銭的なやりとりはない。それは、預かってくれる方からの申し入れだったという。

「お互いに気づかいしすぎないようにしています。こちらからも食事はいつも各家庭で食べているもので、悪いことをしたらちゃんと叱って欲しいなど、本当の孫のように接してと頼んでいます」

うれしいことに、預かってくれる方も「今週は来ないの？」と子どもが来ることを楽しみにしているという。だから「先方の都合を聞きながら、今週はAさんの家、来週はBさんの家」というように、偏りのないように頼んでいるのだそう。

「子どもは、地域に育ててもらっているようなものです。時々『へえー、そんなこと教えてもらったんだ』と我々も驚くようなことを学んできたりしますから。昔、あたり前にあったことを今やっているってことですね」

さまざまなサービスをお金で買えるような時代になり、人に頼ったり、他人の生活に干渉することを避ける傾向になっている現代。しかし、それでもやはり人はひとりでは生きてゆけないものだ。だからこそ、時に周囲に「甘える勇気」も必要になってくるのではないだろうか。本当の気づかいとは、不干渉ではない。頼ったり頼られたりの中で、「ありがとう」という言葉を重ねる中にこそ、生まれてくるものかもしれない。

「小さなことでも、困ったことがあったら、周りに聞いてみたらどうかって思うんです。役場に何かしてもらおうという前に、婦人会でも、近所の人にでも言ってみる。『どうしているかな』って、人知れずお互いを思いやっているところ、それが海士のいいところですから」

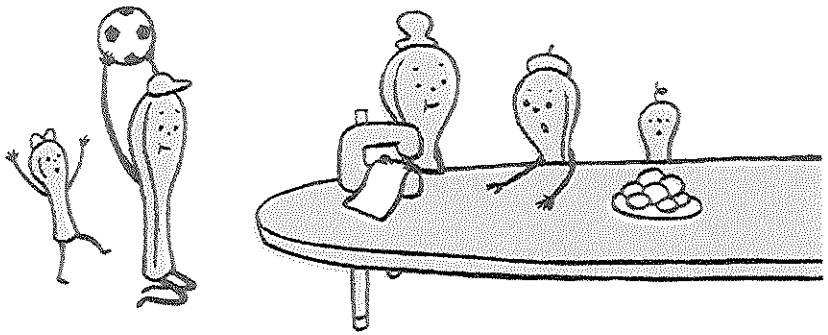
人10人

一人ひとりで

家族や仲間と楽しみながらはじめるまちづくり

07 趣味から広がる出会いの場、海士人宿につどおう。

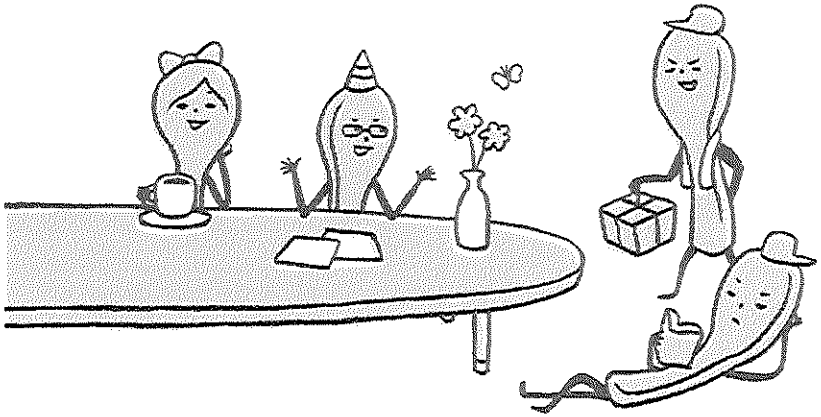
海士人宿とは50年ほど前まで海士町にあった、若者の寄り合い所のようなところ。そこでは、人が出会い、明日の海士を熱く語ったといいます。現在海士町は、UIターンで移住する人も増え、顔は知っているけど話はしたことはないという人が増えているようです。その原因のひとつに、ふらっと立ち寄っておしゃべりする場所や、みんなが盛り上がれる場所がないことがありました。



参考文献
『コモンカフェ―人と人とが出会う場のつくりかた』 山納 洋 著（西日本出版社刊）

そこで、現代版海士人宿をつくりたいと考えています。場所は、島内にある使われなくなった保育園などの空き施設。キーワードは「趣味」です。空いている場所で、自分の趣味を活かして、島内の交流を生み出すという作戦です。例えば、サッカー好きが集まってのサッカー観戦会を計画したり、手芸が得意な人は、工房をつくって手芸教室を開いたり、料理上手が日替わりでカフェを運営してみたり……。予算をかけて新しい施設をつくるのではなく、あるもの（技）を持ち寄って、お年寄りから若者まで、誰もが楽しく過ごせる空間、それが海士人宿です。

まずは、みんなが使えるコピー機などの道具や設備を整える必要があるでしょう。そんな場所づくりから、多くの仲間に出会え、海士で暮らす楽しみがつながっていくように思います。こんなことしたい、あんなことしたいを持ち寄って、海士人宿を一緒につくりましょう。



参考事例
ひがしまち街角広場（大阪府千里ニュータウン）
コモンカフェ（大阪府北区中崎町）

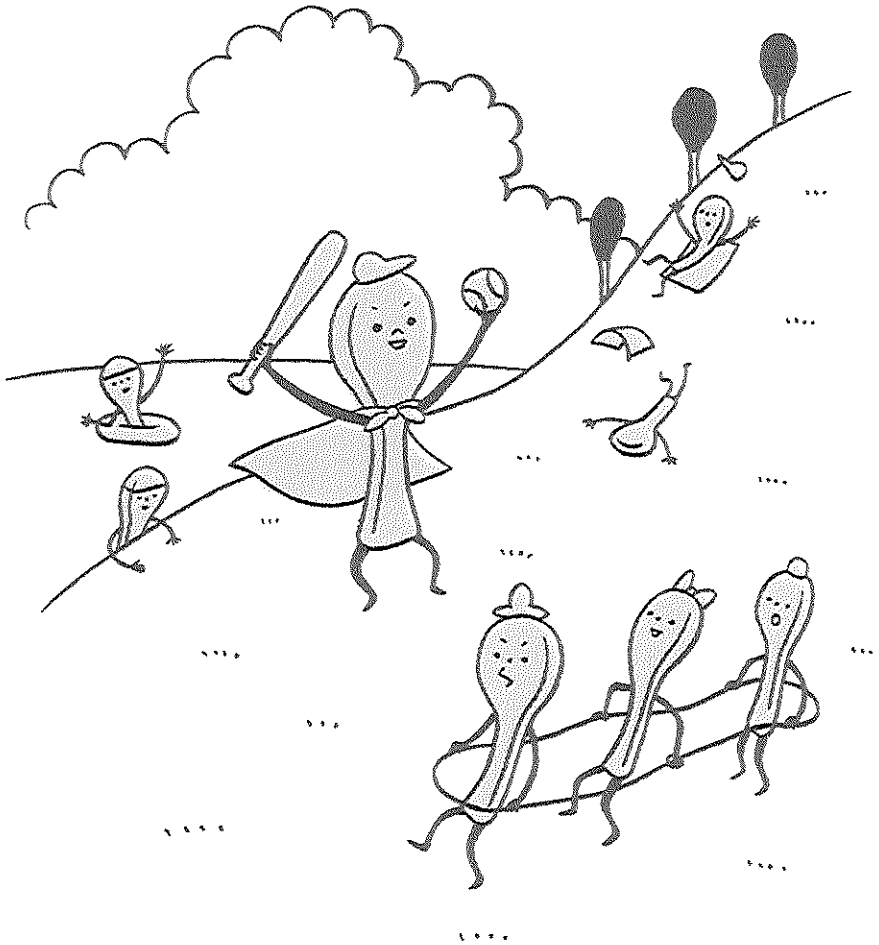
08 海を山をかけめぐれ！未来のリーダー、ガキ大将を育てよう。

かつて島には、海や山で元気に遊ぶたくさんの子どもたちがいました。汗だく、泥だらけになって、時間も忘れて遊んだ懐かしい記憶を持つ大人も多いことでしょう。しかし、今の海士町は、子どもの数も少なく、テレビゲームなど家で遊ぶ道具が増えたこともあって、外で体を使って遊ぶ機会が減っています。こうした生活習慣は、子どもの体力や運動能力にすでに現れており、2008年に文部科学省が行った「体力・運動能力調査」でも、すべてのテスト項目において、子どもの親世代の数値を下回っているという結果がでています。体力不足は、単に体育の授業や部活、スポーツに影響するだけではありません。勉強を持続したり、健康を保ったりするなど、高校生、大学生、大人になってからの生活に大きく影響する可能性があります。

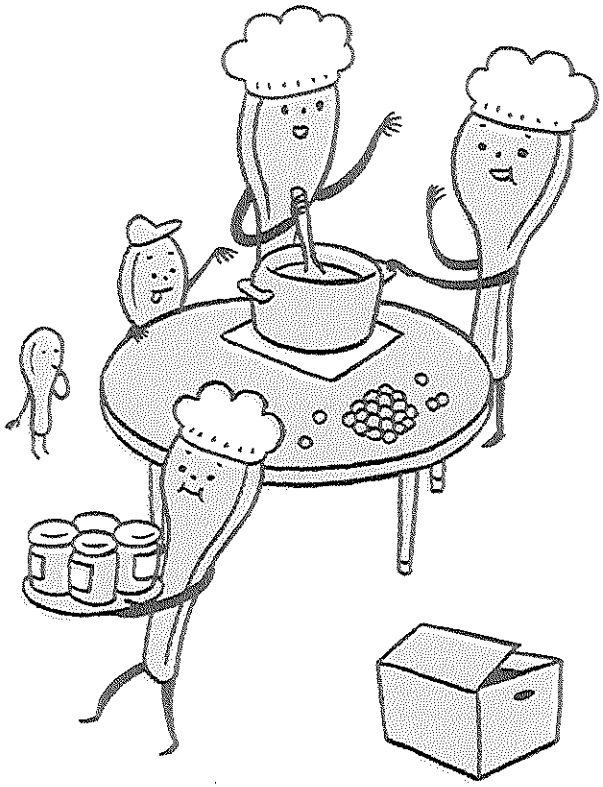
また、集団で遊ぶことで学ぶこともたくさんあります。仲間をまとめ引っ張るリーダーシップ、年少者や弱いものへのいたわりのこころ、新しい遊びをつくり出す創造性など、まさに私たちがまちづくりをするにあたって必要としている要素ばかりです。

そこで、子どもたちが島の子らしく遊べるきっかけとして、元ガキ大将たちが中心になって「海士遊び大会」を企画したいと考えています。丈夫な体をつくり、仲間をつくり、そして将来海士町を担うリーダーを育む。ガキ大将づくりを応援してください。

参考文献
『いろり火』 海士町郷土誌。海士町開発センターにあります。



09 海士女（あまおんな）の知恵と技。あまさん倶楽部で特産品をつくろう。



海士女（あまおんな）の、海士女による、海士女のための寄り合いクラブの提案です。その名も「あまさん倶楽部」。あまさんとは、海士産、海女さん、尼さんの3つの意味をかけたもの。海士に住む女性が、海士産の特産品づくりに挑戦しようという取り組みです。

あまさん倶楽部の特産品は、期間限定・数量限定の加工品。お総菜や漬け物、ジャム、干物などを考えています。島の特産品である魚介類や野菜・果物などの生鮮品は、収穫量に波があり、時に過剰に採れすぎて、廃棄せざるを得ないという問題があります。そうした食材を加工することで、日持ちする商品にしたり、消費しやすい商品にすることができ、廃棄を減らし、島内での地産地消を促すことができるのです。

さらに、あまさん倶楽部のもうひとつの特徴は、「セカンドホーム」の機能を持つこと。これは、加工品の仕事に参加するメンバーで、一人暮らしをしている女性（＝尼さん）を対象に、「第2の我が家」としてあまさん倶楽部を運営しようという試みです。一人暮らしが心細いとき、台風や嵐のときなど仲間と一緒にいたいときに「帰れる家」として倶楽部の施設が活用されます。

女性が何歳になってもイキイキと輝ける島、海士。あまさん倶楽部は、やりがいのある仕事とこころ和む居場所の提供、そして島の地産地消への貢献を目指します。

参考事例
弓削女性塾（愛媛県上島町）

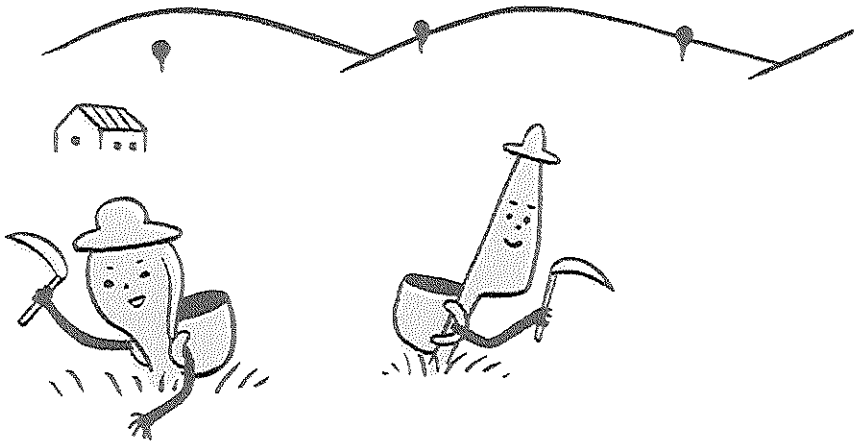
グリーン・ツーリズムの発展版！体験交流を産業にしよう。海士ワーキングホリデー事業。

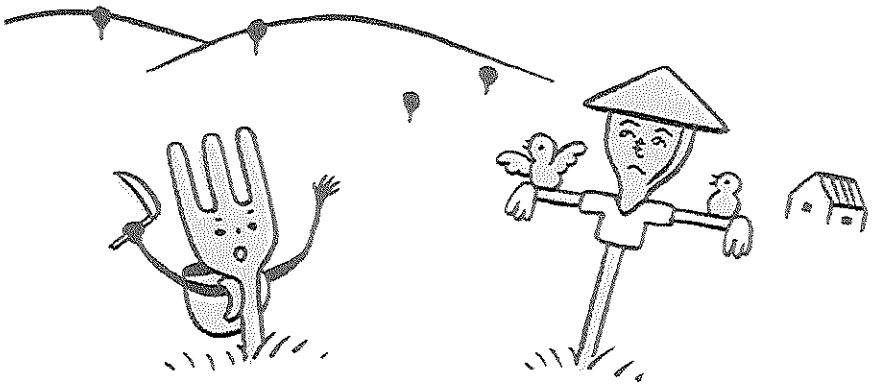
最近、グリーン・ツーリズムやエコ・ツーリズムと呼ばれる、新しい観光のかたちが注目されています。それは、農業や漁業など、田舎ならではの仕事体験を通じて、地元の人との交流や自然体験を楽しむ観光のこと。すでに海士町でも、アグリベンチャーツアーやママのがっこうなど、さまざまな体験プログラムが実施されてきました。

今回は、この体験交流観光をさらに発展させ、1ケ月から1年という長期間、海士に滞在してもらおうという提案です。いわば、海士への「ワーキングホリデー」。仕事をし、給料をもらいながら、島の暮らしを楽しんでもらうのです。

海士の産業である一次産業は、忙しいときとそうでもないときの差が激しく、繁忙期は人手が足りず、特に若い働き手が圧倒的に足りていません。そんな季節によって変動する島の仕事を事務局が一括管理。一年を通していつ海士に来ても、仕事をしてもらえる体制を整えておくものです。例えば、春はいわがき出荷作業、夏は民宿や農業、秋は稲刈り、冬はなまこ漁など、海士らしい体験を提供します。島外の人とふれあうことは、島の住民にとっても貴重な体験になります。都会の視点やパソコンなどの技術は、新たな商品開発や販売のアイデアにもなるはずです。

基本は島外の出郷者や若者向けに考えていますが、島内で仕事を探している人の仕事体験としても活用できます。

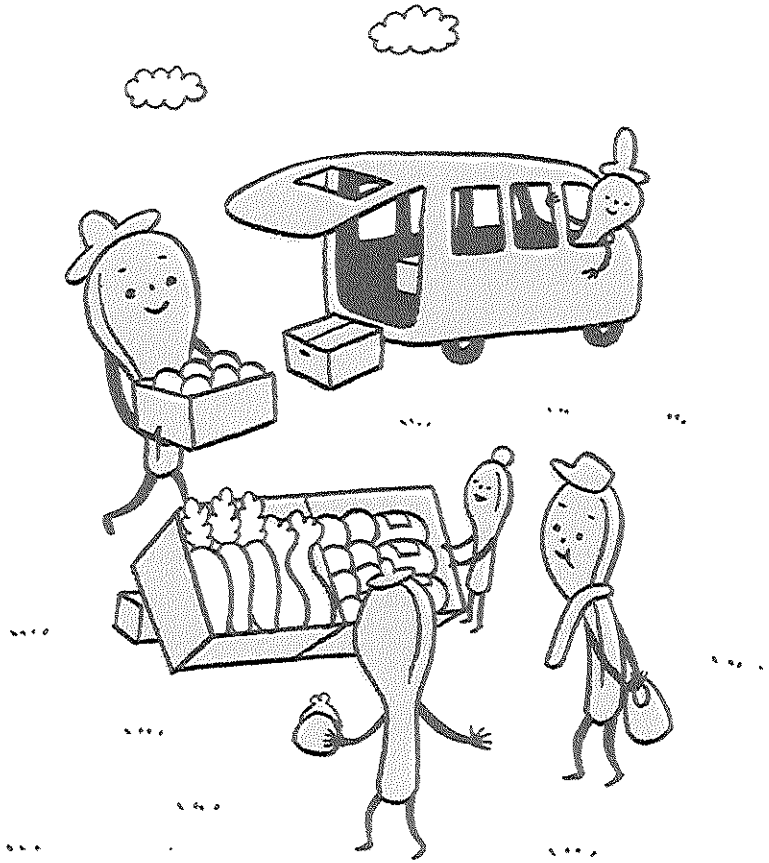




❓用語解説

ワーキングホリデー…海外で、仕事をしながら休日を楽しむ制度。通常は、海外で仕事をすることの許されない観光ビザでも、他国の理解を深めるために特別に許可するもの。

移動販売と
はかり売りの店、
ワゴンショップ海士号。



急速に高齢化と人口減少が進んでいる海士町では、買う人の状況も昔とずいぶん変わってきました。高齢化と核家族化で、お年寄りの単身もしくは、2人暮らしという家庭が増加。人口が減ることで商店も減少、店のない地域もあります。家の近くに商店がない人や移動手段を持たない人にとって、買い物は困ったことのひとつになっています。こうした状況は「まちの問題」としてとらえられがちですが、実はこの「困った」こそ、新しいチャンスを生むのです。

買い手のニーズを考えてみると、近くにお店がほしい、1人または2人家族が使いきれる量で売ってほしい、海士町産のものがほしい、お店でおしゃべりや情報交換がしたいなどがあげられます。そこで、そんなニーズにこたえるために移動販売の店「ワゴンショップ海士号」を走らせてみませんか？ワゴン自動車に商品をつんで島の集落をまわり、食料品や日用品を販売するお店です。野菜は少量でも販売できるはかり売りを導入。あまさん倶楽部（⇒p44）などと連携して、島の特産品を買えるようにするのもいいかもしれません。青空市場風にお店を広げれば、集いの場にもなります。すでに、「ひまわり」や「海士人の出張ビアガーデン」「つむぎや」のおばちゃんなど移動販売の先輩もいます。先人の経験を参考に、誰もが買い物を楽しめるまちを目指しましょう。

用語解説
ワゴン自動車…箱型でうしろに荷物が積めるタイプの車。
ニーズ……必要としていること、要望。

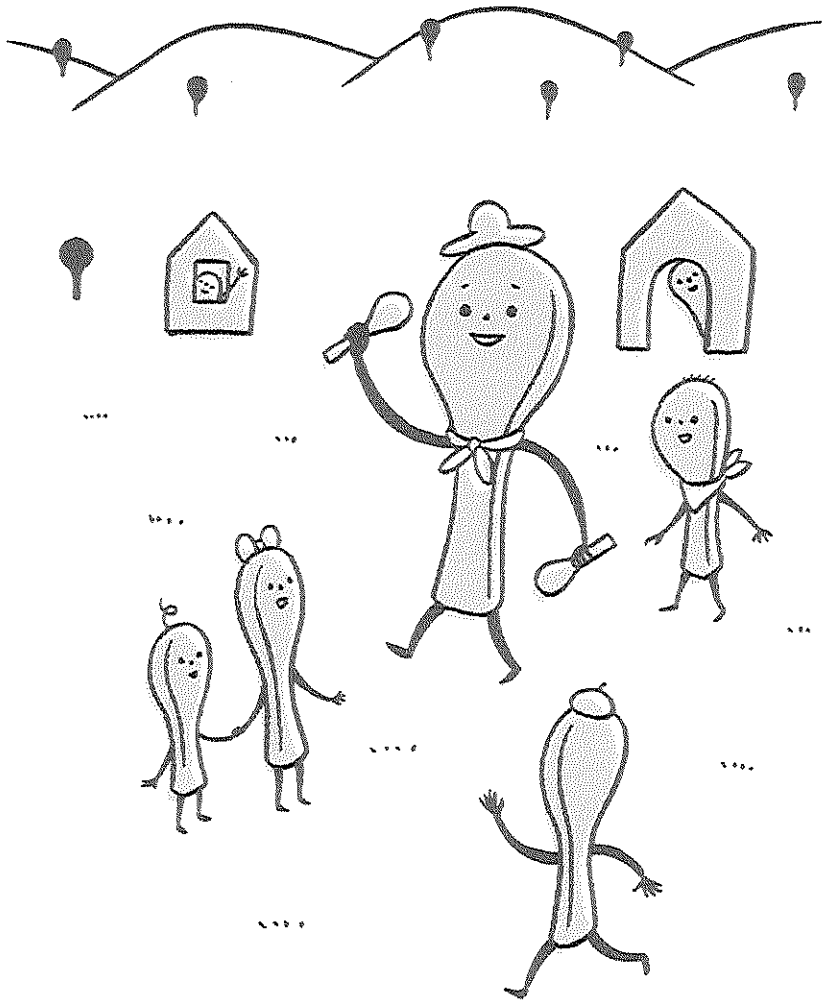
12 安全・安心の地域づくりのかけ橋。おさそい屋さんになろう。

「顔は知っているけど、あんまり話をしたことは……」。そんなご近所さんいませんか？今、海士町で心配されていることのひとつに、海士町の近所づきあいが薄くなってきているのでは？ということがあげられます。近所づきあいがなくなるということは、いざ災害が起きたときや家で困ったことが起きたときに、いちばん身近にいる人に助けを求められない、そんな状況を生み出す可能性があるということ。これでは安全・安心なまちとはいえないのではないでしょうか。

そこで、地域交流を盛り上げるために、新たな地域ネットワークをつくりたいと思います。名づけて「おさそい屋さん」ネットワーク。これは、海士の人の「さそわれたら動く」という島気質から考えられたもので、住民に声をかけて、地域の活動にさそうボランティア「おさそい屋さん」をそれぞれの地域に育てていこうというものです。

幸いにも海士町には地域づくりを勉強した人や地域に関わることが大好きな人がたくさんいます。こうした人を中心に「海士町の地域を考える会」を同時に設立し、「おさそい屋さん」とともに、どんな交流会を開いたらいいのか、どうやって「おさそい」すればいいのかなど、一緒に考えていきます。「おさそい屋さん」が町の津々浦々にいることで、それぞれの地域の問題をみんなで一緒に考えることができます。お年寄りも、共働きの家庭も、1人暮らしも、みんな安心して暮らせる海士町。これが「おさそい屋さん」の目標です。

参考文献
『多井の人がもっと幸せになる25の方法』 海士町社会福祉協議会発行



コラム 2

福祉は「お世話すること」なのだろうか？ 都会の学生が「多井」に住んで、気づいた福祉の意味。

ここに『多井の人がもっと幸せになる25の方法』という本がある。これは、2008年の夏に多井地区に一ケ月滞在した、岡山県倉敷市にある福祉系大学の2人の学生によってまとめられたものである。多井地区の世帯数は15世帯。日中の高齢化率は90％にもなり、一軒の商店もないという、まさに「限界集落」地域。そこに、学生たちは高齢者福祉を学ぶためにやってきたのだ。

「当初、学生たちは地域住民の『お世話をしたい』という気持ちで、入っていったんだと思います」

そう語るのは、学生たちと多井地区のパイプ役を担った、社会福祉協議会事務局長の片桐一彦さんだ。片桐さんは、学生たちに一ケ月間、公民館で暮らしてみることを提案する。

「多井地区は、何もないところです。コンビニもない、インターネットもない、自動販売機もない(笑)。そんなところでは、彼らは、お世話する側ではなく、される側になってしまったんです」

家電のない公民館暮らし。そんな中、地域住民が洗濯機を学生に提供してくれたのだが、その洗濯機は昔懐かしい二槽式。若い学生たちには見たこともない代物ゆえ、使い方も教えてもらわなくてはいけなかった。また、多井地区には商店がないため、学生たちは菜園で育てた野菜やお惣菜を分けてもらい、タコをもらえば「タコのさばき方を教えてください」と住民に呼びかけ、助けてもらったという。

「何もできない学生たちが入っていくことで、多井地区の人たちの心には『支えたい』という気持ちが沸き上がってきたのだと思います。そして、そこに生

『多井の人がもっと幸せになる25の方法』

まれる『ありがとう』という言葉。これは、下手すれば一日中だれとも会話をしない高齢者たちにとって、すごく意味のあったことだったのではないでしょうか」

とかく福祉とは、社会的弱者を「お世話する」ことや「ボランティア」のようなものだと思われている。しかし、これを見れば、多井地区のお年寄りたちが「支援の必要なかわいそうな人たち」ではないことがわかるだろう。

「お世話という意識を超えたところにこそ、私たちが目指す福祉があるのではないかと思っています。福祉を広辞苑で引いてみてください。その意味は『幸福』だと書かれています。多井地区の人たちは今、不幸でしょうか。いや、もともと『幸福』なのではないかと思うのです。私たちができることは、今よりももう少し幸せを感じてもらえるようにすること。それは、今回の学生との交流のように、笑顔を増やすことなんだと思います」

「不幸への転落は、孤独から始まる」。そう片桐さんは言う。だからこそ、「お世話」という意識ではなく、ともに笑いあえる機会を考えることが大切なのだ。

今年の夏、また学生たちは「お世話をされに」海士にやってくるという。「みなさん、お茶会をやりましょう。公民館にあつまってくださ〜い」という地区放送に、いそいそとお茶うけの漬物を持って、おじいちゃん、おばあちゃんが集まってくる姿が目に浮かぶ。「あの子たちは、お茶しか用意してないからなー」といいながら。そこに、ニコニコとした笑顔が浮んでいたら、それこそ「幸福」が生まれたあかしになるだろう。■

100人

でリンゴ剥いた

学校や地区単位で協力し合ってやっぱりくちまるめ

13 漁師さんも公務員も島民みんなで、ちいさな農のある暮らし。

江戸時代、日本の人口の約8割以上が農民だったのを知っていますか？その頃は、もちろん農薬も化学肥料もない時代。馬糞や人糞、雑木山の腐葉土を堆肥にして、今流に言えば循環型の農業を行っていました。実は海士町でも、昭和40年代までこうした農業が主流で、個々の家では、米のとぎ汁も牛に飲ませるなど、むだのない農業を営んでいたのです。しかし今、この農業の後継者不足が深刻な問題になっています。このままでは、自給自足はおろか、世界的な食糧危機に対しても、太刀打ちできない可能性があります。

そこで、農業の後継者を増やす努力をする一方で、島民みんなでちいさな「農」をはじめてみませんか？島外にまで作物を売るような農業でなくても、家で自給したり、ご近所さんにおすそ分けをする程度の小さな農でいいのです。つくるものも野菜だけでなく、みかんや栗の木を植えてみたり、ハーブ園をつくるのもアイデアです。時にはみんなでつくった野菜や加工品を持ち寄って朝市をやるのもいいでしょう。こうした農のある生活は、環境にやさしい農法を学ぶ機会にもなりますし、できた野菜は体にもやさしいものになり、観光客の目にも魅力的に映るはずです。

多くの人が農のある暮らしを実践するには、今ある休耕地を貸し借りできる制度づくりや、環境にやさしい農法を学ぶ機会もつくる必要があります。行政と一緒に進めていきたいものです。

参考文献
『半農半Xという生き方』 塩見 直紀 著（ソニーマガジンズ新書）

間伐・竹炭づくりで、竹の里山を復活させよう。炭焼きクラブ「鎮竹林（チンチクリン）」。

今、竹林がたいへんなことになっています。放置竹林です。手の入っていない竹林は、その生命力があだとなってどんどん増殖し、光をさえぎり他の植物の成長を止めてしまいます。また竹は根が浅く、大雨になると土砂崩れをおこしやすく、流れ出した土が海をにごらせるという被害にもつながっているそうです。そこで、竹林を広葉樹の森に変えたり、持続的に手入れが可能な竹林は、間伐をし、竹の恵みを活かす活動が必要となっています。

海士町には、いち早く放置竹林の問題に取り組んでいる人たちがいます。炭焼きクラブ「鎮竹林（チンチクリン）」です。彼らは、竹林の間伐を行い、間伐した竹で炭をつくっています。また今後は、間伐した竹を海に沈めて漁礁にしたり、竹炭を商品化するなども考えているそうです。手入れした竹林では、質のよいタケノコも取れるようになりますから、一石二鳥にも三鳥にもなる活動です。

困りものの竹林から、竹炭やタケノコ、漁礁づくりなどの竹の恵みが享受できる「里山としての竹林」に変えていく。炭焼きクラブ「鎮竹林（チンチクリン）」と一緒に、竹の里山モデル地区をつくりませんか？

参考文献

『漁師が山に木を植える理由』 畠山 重篤、松永 勝彦 著（成星出版刊）

『竹炭をやく生かす伸ばす』 片田 義光 著　山梨県身延竹炭企業組合 編（創森社刊）

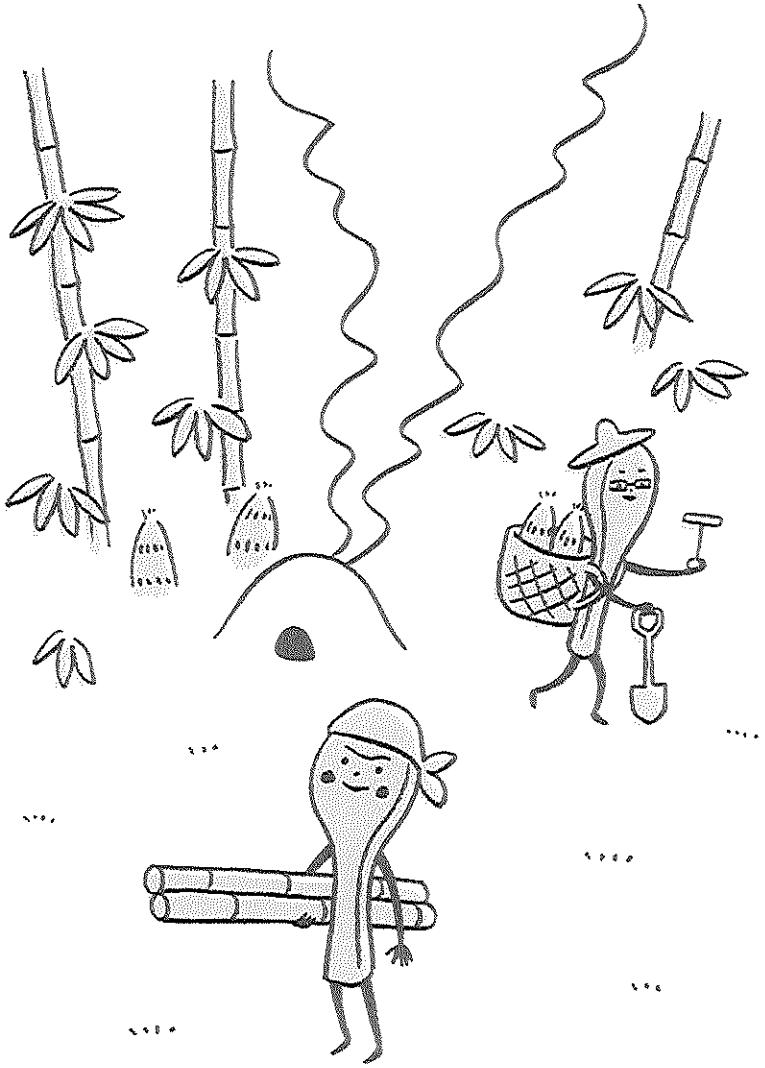
『逆さ竹林漁礁の利用』 独立行政法人水産大学校　浜野 准教授

参考事例

NPO法人 E.D.E.N.（大阪府大東市）チクリンチック

用語解説

里山…人間が生きるために必要な薪や炭、きのこなどの食糧を得るために人によって手入れされ管理されてきた山。

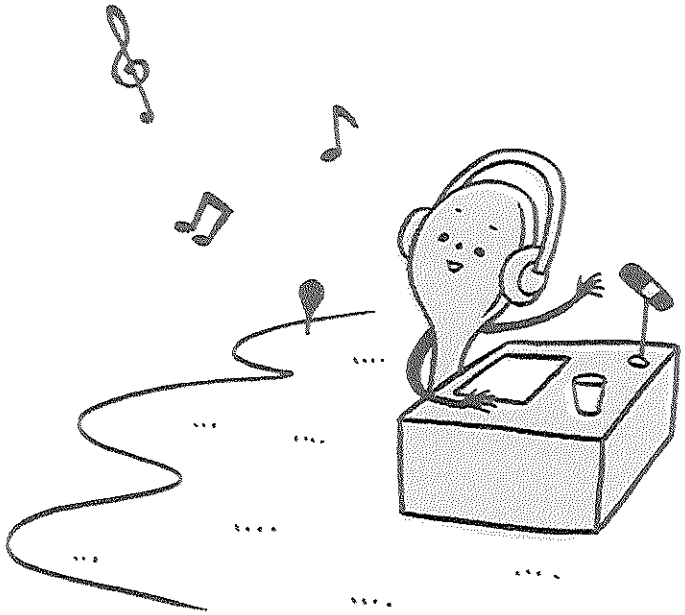


15 海士町の魅力を全国に発信。AMA情報局を開局しよう。

海士町の人口が極端に減りはじめたのは、昭和30年代ごろからのこと。多くの若者が、進学、就職、結婚、そしてそのまま都市に定住という形で流出していきました。確かに島内の人口は減りましたが、一方で「海士経験者」は島民の数よりも多く存在し、彼らもまた、海士のことを大切に思ってくれています。しかし、何らかの交流がなければ、海士の記憶も薄らいでしまうというもの。また、出郷者の会（関東海士後鳥羽会、近畿海士後鳥羽会）も高齢化が進んでいるといいます。せっかく強力な海士ファンになってくれる可能性のある人たちです。こうした人たちともっとつながる必要があるのではないでしょうか。

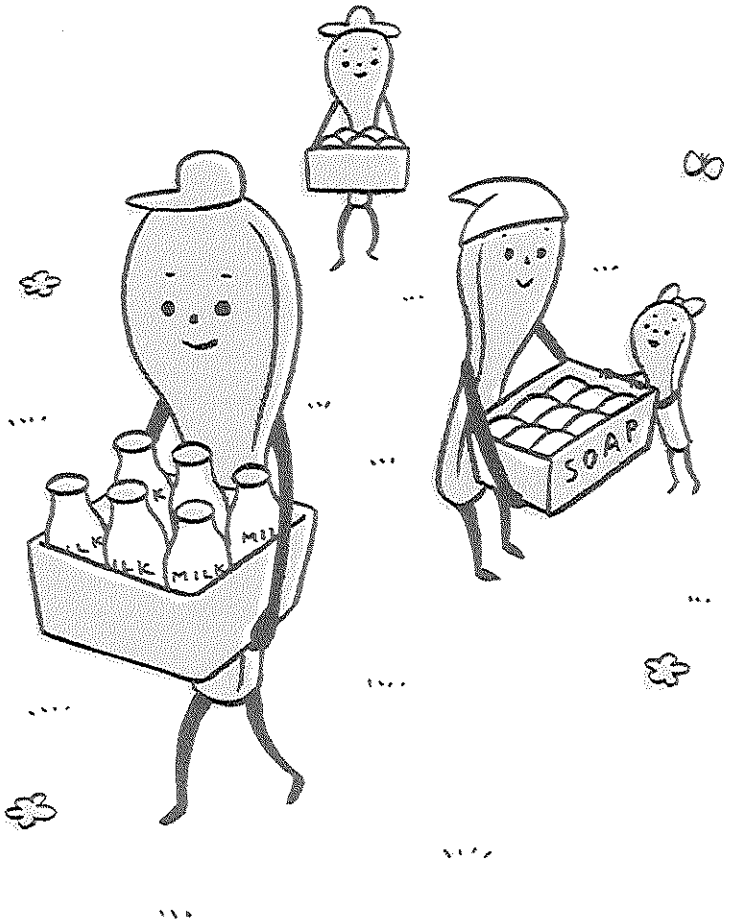
そこで海士に来たことのある皆さんに向けて、もっと島の情報を発信したい！その名も「AMA情報局」の開局です。

情報発信の方法は、受け手の年齢にあわせて新聞やインターネットなどを考えていますが、何よりも重要なことは、島外に住む人たちが魅力を感じる情報を提供することです。そこで、情報発信を担う人材を育成し、情報発信の技術だけでなく、地域の宝を発見する目も養いたいと考えています。まずは海士経験者から、そして未来の海士経験の人たちにも、海士の魅力を伝え、島とつながってもらう。そのつながりは、島に住む私たちをも磨いてくれるはずです。



参考事例
NPO法人 くまもと未来（熊本県）…地域づくりのディレクターであり、地域情報の発信者である「住民ディレクター」の養成を核に総合的なまちづくりを応援するNPO法人。

16 海士町単位で考える自給自足と地産地消。欲しいものは島でつくる。



人口の少ない海士町では、島内での需要が少ないため、いかに全国で売れるものをつくるかに腐心してきました。しかし、多くの島民は島の外からたくさんのものを買っています。

一方で島には需要がないといい、一方で島には欲しいものがないという。このアンバランスさの原因は、本当に島民が必要としているものが何か、わかっていないことにあるのではないでしょうか？例えば、唐辛子などのスパイス、石けん、子ども服、牛乳など。海士町でつくれないものもあるでしょうが、これならできる、というものがたくさんあるはずです。もし、島の中で、島の人が買ってくれるものをつくれれば、それは島単位でみれば自給自足になります。そこには、輸送コストもエネルギーもかかりません。つまりとっても無駄がないのです。

まずは、島内にまだ気づいていないニーズはないか、調査する必要があるでしょう。さらには、海士町製もあるけど、わざわざ島外のものを買っている人には、なぜ海士町のものを選ばないか聞くことで、よりよい商品開発ができるかもしれません。町内自給・町内消費。海に囲まれた海士だからこそ、地産地消の推進が大切です。

7 楽しさも不安も みんなでわけあう。 支えあって暮らそう。

高齢化が進む海士町では、すでにある高齢者施設は飽和状態になっています。残念ながら、こうした福祉施設を増やすことは簡単ではありません。これからますますお年寄りが増えることが予想されている今、高齢者福祉の新たな手段を見つけ出さなくてはいけない状況にきています。

こうした公的サービスの隙間を埋めるものとして、「生活支援ハウス」や「グループホーム」という住民が主体となった福祉のあり方が注目されています。「生活支援ハウス」とは、1人暮らしやお年寄り夫婦のみの世帯で、独立して生活するのに不安がある人向けのアパートのようなもの。要介護の方は介護サービスを受けることも可能です。「グループホーム」は、同一の障がいを持った者どうしが福祉サービスのもとに共同生活を送る施設です。いずれも、共同生活をすることで、孤立・孤独でさらに体調を崩すことを防ぐのが目的です。

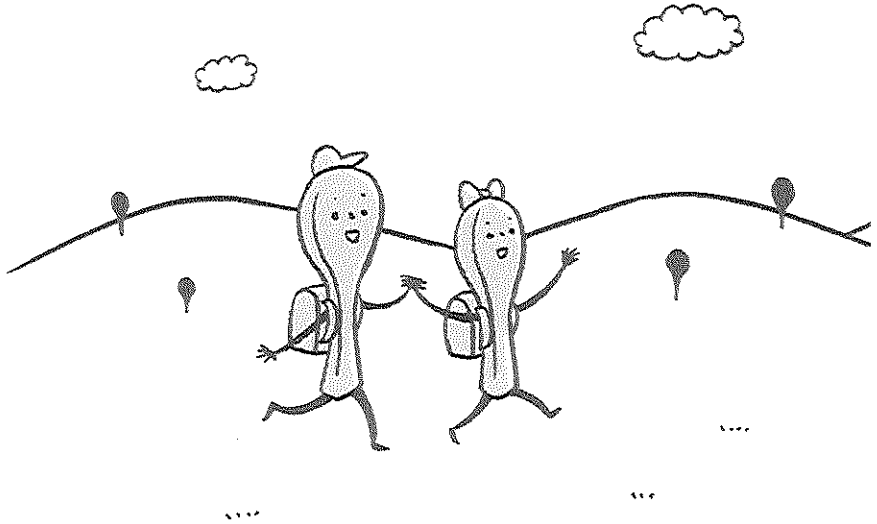
そこで空き家や空き民宿を利用した、海士町独自の「支えあいハウス」を考えてみてはどうでしょう。一時滞在型のタイプや、気のあったお年寄りどうしでの共同生活を支援する事業もいいかもしれません。支えあうことで、いつまでも島で安心して暮らせる。これが願いです。

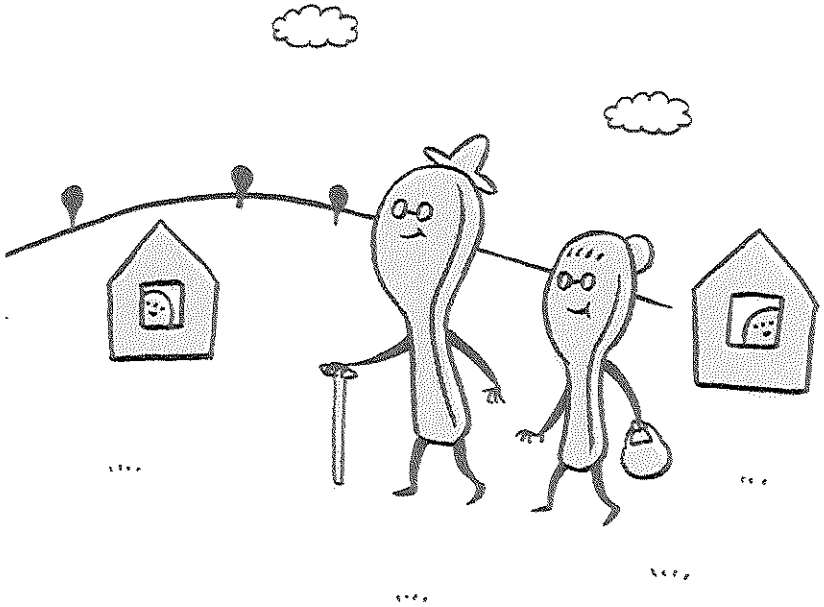
参考事例
弓削女性塾（愛媛県上島町）

18 ご近所さんは、大きな家族です。地域に「ただいま」を言おう。

核家族や共働きで忙しい夫婦にとって、学校から帰ってきた子どものめんどうは、ちょっとした悩みのタネです。こうした家族にとって、子どもを見守ってくれる人が身近にいることは、大きな支えになります。そこで、地域を大きな家族に見立て、地域全体で「ただいま」「おかえり」「いってきます」をいいあえる関係をつくっていってはどうでしょう。そのためにも、まずはどんな人が同じ地域に住んでいるのか、どんな子どもが地域の子どもなのかをお互いに把握する必要があります。例えば、「おさそい屋さん」(⇒p50)の主導で、月に一度「お茶の会」や「おかず交換会」を地域で催してみるのもいいでしょう。回を重ねて信頼感が深まれば、子どもを預かってもらったり、子育ての悩みを相談したり、育児の息抜きをしたりと、学童保育に頼らなくても、地域で子どもを育てられるようになっていきます。これは、子どもにとってもありがたいこと。どんな世代の人ともつきあえる、物怖じしない性格は、行事が多い海士町ではとても重要なことだからです。

まずは、あいさつ「おかえり」「ただいま」からはじめてみませんか？地域のきずなを深める提案です。





19 海と山は、つながっている！里山・里海をつくろう。

今、海士の浅い海では「磯焼け」という現象がおきています。これは、「海の砂漠化」とも呼ばれるもので、ワカメやアラメなどの海藻類が減少することで、これを住みかや食糧にしている魚やアワビ、サザエなども減り、生態系のバランスが変わってしまうことをいいます。磯焼けは、漁師の方々にとっても死活問題。海士の特産品づくりにも打撃を与えます。磯焼けの原因は、まだ不明な点が多いのですが、そのひとつに土砂などの流入による、日照不足があげられています。では、なぜ土砂が流入するのか。この原因、実は山にありました。木材用に植えたスギやヒノキなど針葉樹林や竹林が、間伐されず、放置され荒れ放題になっているのです。これらの針葉樹や竹の根は、広葉樹に比べ地表の浅いところにしか伸びていけません。それゆえ、土砂崩れをおこしやすく、山の保水力も低くなってしまうのです。激しい雨が降ると、こうした山からは、山にしみ込めなかった雨ともに、大量の土砂が川と海に流れてしまうのです。

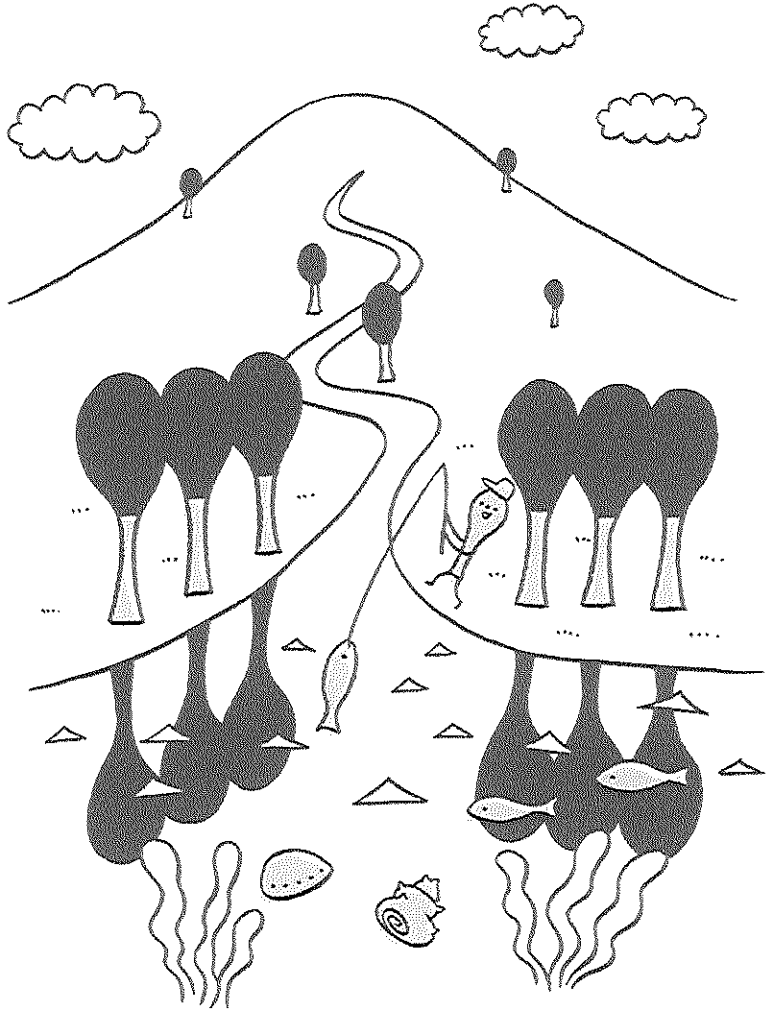
この山と海の悪循環を断ち切るために必要なのが、里山と里海づくりです。里山とは、間伐など人の手が入ることで、逆に生態系が豊かになり、薪や木材、きのこなどを採取することができる山のことをいいます。同じように里海も、生態系が保たれるように、環境を保全しながら、海の幸を享受できる海をいいます。

海も山も別々に存在しているものではありません。どちらもその豊かな恵みをいただくには、私たちが手間をかけ、手入れをしていく必要があるのです。里山・里海づくりとは、島に生きる私たちだからこそ、やらなくてはいけないことなのです。

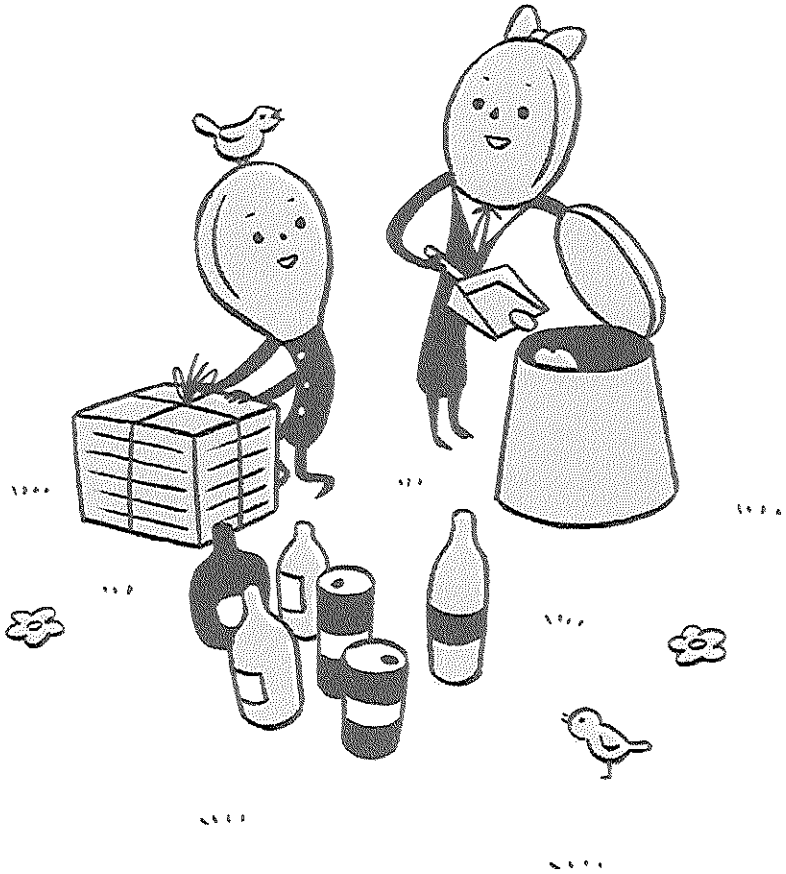
参考文献

『森の楽校―自然と遊ぼう』 小林 毅 著（山と溪谷社）

『海の楽校―自然と遊ぼう』 長谷川 孝一 著（山と溪谷社）



20 未来に残したい ふるさとがあります。 みんなで学ぶ島のエコ。



テレビをつければ、最近よく耳にする「エコ」という言葉。わかっているけど、実際に何をしたらいいのかわからないという人も多いのではないでしょうか。豊かな自然に囲まれている海士町だからこそ、危機感がなく、環境意識が薄いのも悪しき特徴でもあります。しかし、異常気象や海や山の生態系の変化など、決して他人事ではない現実が島でも起きている今、私たちの生活の中で、何ができるのか、何をしなくてはいけないのかを知る必要があるのです。これを「環境教育」といいます。

今年、海士中学校のエコ改修が完了しました。これは、壁に植物のカーテンを設置したり、窓に断熱性の高いペアガラスを使用したりと、環境に配慮した建物に改造したものです。これを機に、中学生たちは、環境に関する勉強も始めています。そこで、海士中を島の「環境教育の発信基地」にしていってはどうでしょう。例えば、環境に関する本が借りられたり、中学生の学びの成果を発表・発信してもらったり、環境イベントをしたりして、島民のエコに対する意識を変えていくのです。みんなが学ぶことで、毎日の暮らしの中で、お祭やイベントで、エコな行動や意識をもって活動することができます。島の宝である子どもたちのためにも、島民全員で「島のエコ」を学んでいきましょう。

参考文献
『明日はきっとサステナブル』
枝廣 淳子 翻訳監修（サステナブルデザイン国際会議実行委員会 編）

コラム 3

記憶に残る給食を！ 島民の想いをレシピにのせて 地産地消の給食づくり。

地元で採れたものを地元で使う。地産地消を推進する海士町長のもと、「地産地消の給食づくり」がスタートしたのは、3年前のことだ。現在、小中学校の給食材料の6割を海士産の野菜や食品を使っており、少なくとも一日一品は海士産メニューが登場する。

そんな海士印の給食づくりに奮闘しているのが、給食センターで栄養士をしている小田川啓子さんだ。食材の手配から、メニューの開発、栄養管理などを通して、安全でおいしい海士産の味を子どもたちに届けている。

一言で地産地消の給食づくりといっても、その実現は簡単なことではない。特に、コスト管理の面ではかなりの苦労があったという。なにせ、海士産の野菜は、本土で大量生産されたものよりも2～3倍も高く、しかも、生産者によって大きさや形が違うため、短時間で大量の調理をしなくてはいけない給食の現場では、作業に負担がかかるからだ。

「2年目までは、少しでも安く、と値段の交渉もしていました。しかし、実際に野菜づくりの大変さを知ると、値引きを求めるのではなく、メニューや調理法でどうにかできないかを考えるようになりました。今では、給食でほぼ毎日使うニンジンは、生産者さんと仕入れ先の協力の下、海士産でまかなえるようになっています。海士のニンジンは、きれいですよ。本土に自慢したくなるほどです(笑)。野菜って生産者さんによって、違う顔をしています。それが素敵なことだって、最近つくづく感じています」

『うれしい！楽しい！美味しい！学校給食』
http://kyuusyoku.cocolog-nifty.com/blog/

そんな小田川さんは、毎日の給食についてブログで紹介している。キーワードは「想い」だ。

「私は、給食を通じて、何を伝えられるのかが重要だと思っています。実際にこの地産地消のプロジェクトは、たくさんの人の想いがあって成り立っています。生産者さんの想い、支援者の方々の想い、保護者の方の想い……。こうした中で、海士産の食材を使えるということは、すごいんだということを子どもたちには分かって欲しいんです。今は、海士の給食しか知らないから、その素晴らしさが分からないかもしれないけど、大人になって海士の給食を食べられてよかったな、と思い出せる『記憶に残る味』をつくっていきたい」

現在、すべてが海士産という給食は年に1～2回。これを一日でも多くすることが、小田川さんの目下の目標だ。そのためにも「CASシステム」での旬素材の冷凍には期待を寄せているという。また、さらに小中学校にとどまらない給食のあり方も考えているようだ。

「昨年、各地域のお年寄りに学校給食を食べにきてもらいました。学校給食を多くの人に知ってもらうのが目的ですが、学校と地域、世代間の交流を促すきっかけにもなりました」

学校給食だからできること。海士だからできること。今日も小田川さんのブログは、みんなの「想い」をいっぱい詰めて更新されている。

1000人でまちづくり

浦士町で暮らすみんながー丸となってはじめるまちづくり

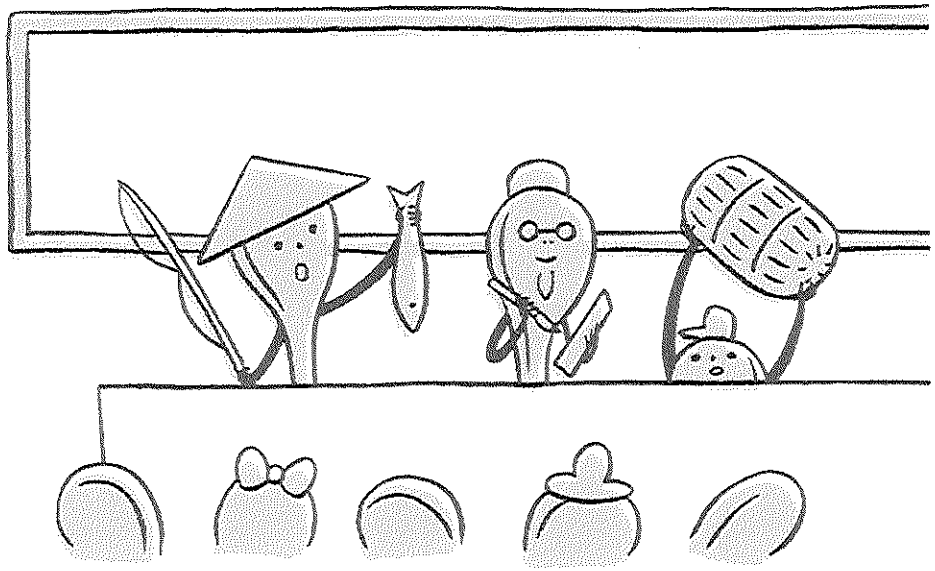
地域と保護者と学校の連携プレーが大切です。地域が支える学校づくり。

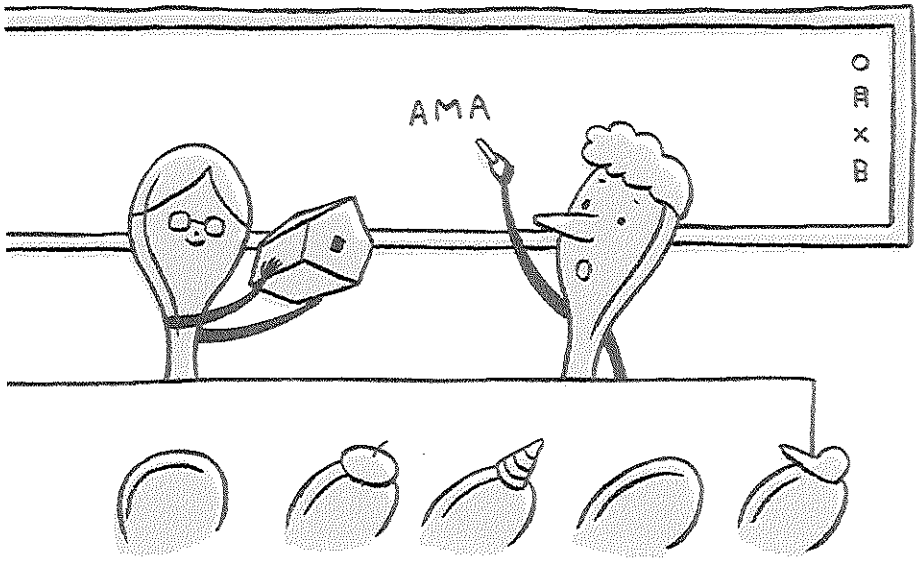
学力低下や体力低下が全国的な問題になっている昨今、海士町も例外ではありません。今まで教育や子育ては、学校や教育委員会にまかせきりにしてきましたが、共働き家庭や島での子育てに不安を持つ親のためにも、もっと地域ができることがあるのではないかと考えました。

例えば、スポーツや部活、習い事などが保育園から高校まで一貫して続けられるような体制の整備や、海や山、島の自然の中で存分に遊べる環境の提供、地域の中で生きる力を養えるよう、地域文化の継承や地域の手伝い、働く体験をする機会を増やすなど、学校単位ではできない横断的な支援が考えられます。

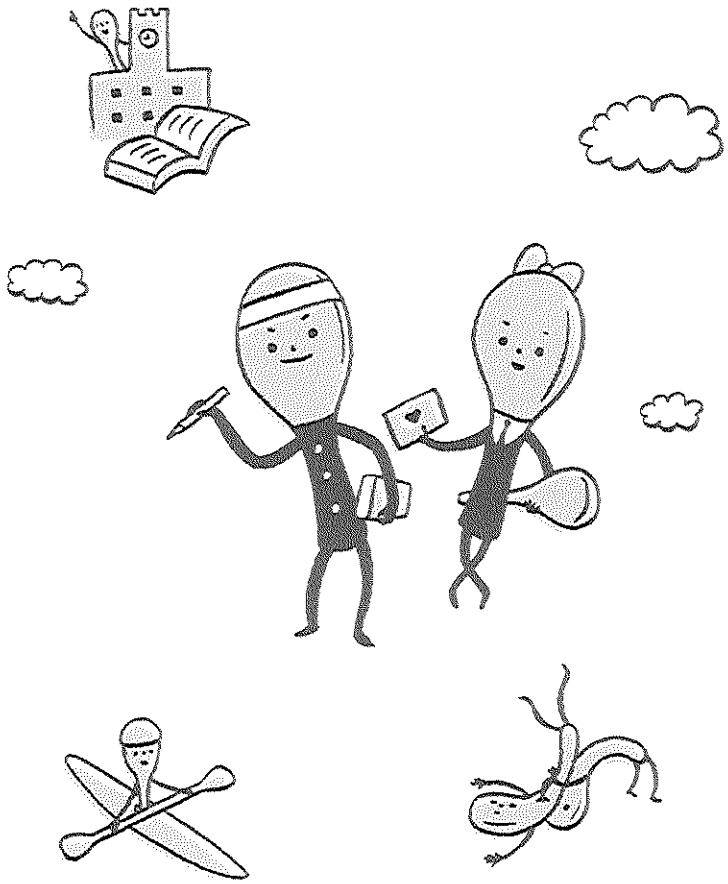
こうした活動をするためにも、保護者や地域、学校との連携を進めるための仕組みづくりが大切です。また、子育てが終わった世代にも、地域で子どもを育てるんだ、という意識を持ってもらうことも重要です。お年寄りに子どもとの接点を持ってもらうことは、お年寄りにとっても、生きがいにつながるかもしれません。

地域が支える学校づくり。島全体で子育てをすることで、海士町への愛郷心も育てていきたいものです。





22 進学もスポーツも あきらめない。 魅力ある島前高校をつくろう。



島前高校の入学者は年々減ってきています。平成20年度の入学者数は28人。入学者数21人を切ると統廃合の問題も浮上してきます。子どもがいる家族の流出を防ぐためにも、島前高校の存続は重要な課題です。

島の子どもたちが島外の高校へ進学する大きな理由。それは、大学への進学です。島前高校からでも国公立大学を狙えるようならば、島に残る生徒も増えるはず。例えば、特進クラスや補習部、土曜補習など、生徒の進学希望を実現できる体制づくりが必要です。

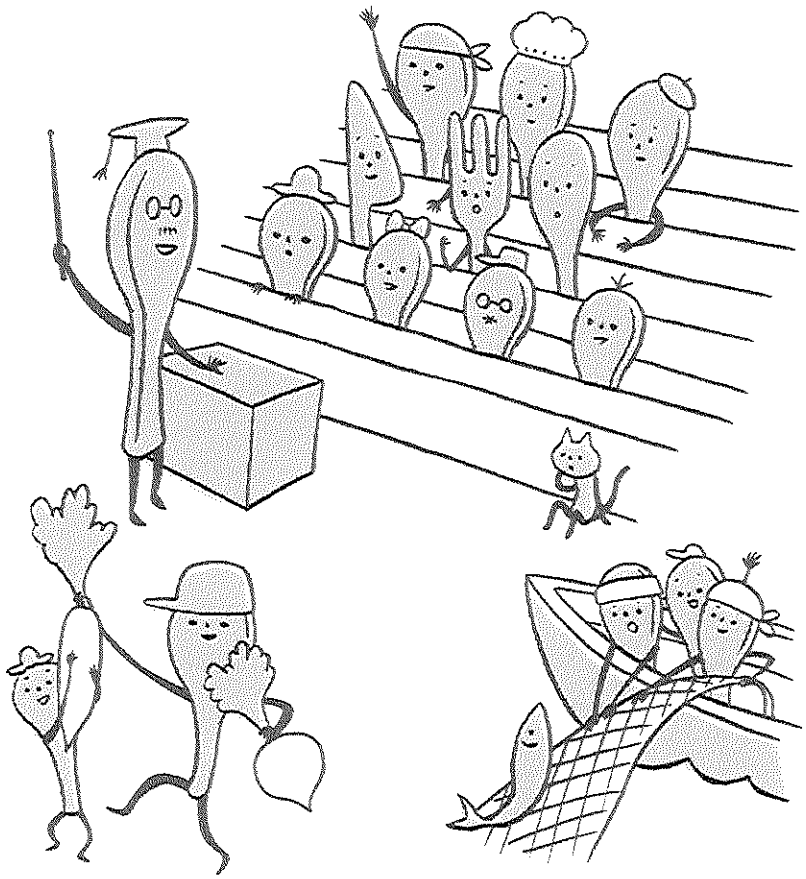
また、他の高校にはない、島の特色を活かした高校にしていくことで、島内はもとより島外からも生徒が集まる島前高校をつくることができます。例えば、ヨット、ダイビング、カヌー、船舶など海を活かした授業や活動ができるようにしたり、福祉やものづくりを学べるコースをつくるなどが考えられます。その他にも寮を使った交流や、島外からのスポーツ合宿の誘致など、できることはたくさんあります。

魅力的な高校づくりは、UIターンする人にとっても、子育ての不安を解消できるメリットです。だからこそ、地域の声を高校運営に反映してもらえるよう、高校と地域が連携できる仕組みづくりを考えていく必要があるのです。

用語解説

松江の高校へ進学した場合の費用…松江市内の高校に進学した場合にかかる3年間の費用 約400〜500万円

23 海士を学ぶことは、海士に生きる喜びを知ること。海士大学に入学しよう。



海士の暮らしの中で育まれ、伝えられてきた技術や文化は、訪れる人々に感動を与える私たち島民の財産です。そんな海士らしさを再発見し、学ぶことは、海士を知る喜びとともに、海士らしい人生の楽しみ方を学ぶことにも通じます。

海士町では、10年前から島全体を大学に見立てた「カレッジ開校事業」を展開してきました。ここでは、農林漁業から伝統文化・歴史、食やスポーツまで、様々な分野における達人を発掘・育成し、「後鳥羽人材バンク」という達人リストを制作したり、達人の技や海士の自然や歴史、伝統を生かしたカリキュラムをつくってきました。

こうした海士に眠っている伝統や技といった文化資源を掘り起こし、体験することは、住民にとって、海士の魅力を意識化する作業でもあり、新たな観光資源や産業のアイデアの源にもなります。さらに、島外の参加者を募ることにより、学びという共通の体験を通して、人材交流や海士ファンを増やすことも期待できます。

海士の誰もが先生になり生徒になれる海士大学。海士に生きる楽しみを学びの中から見つけてみませんか？学びからはじまる可能性を存分に味わってください。

参考事例

シブヤ大学（東京都渋谷区）…東京都渋谷を大きな大学に見立て、市民が参加できるさまざまな講座を行っている。

「講師の心.com」……さまざまな分野の講師を検索できるサイト

24 あなたの活動を応援します！海士まちづくり基金をつくろう。

この本で紹介したアイデアや、これからみなさんが新たに提案するまちづくりを実現していくためには、具体的なしくみやサポートが必要です。そこで、まちづくりの輪を海士町全体に広げていくために、「海士まちづくり基金（仮）」を創設したいと考えています。

この基金は、住民の手による「誰もが海士で幸せに生きることにつながる活動」に対して、個人または、団体に助成を行います。時代と島のニーズに対応した課題を取り上げ、生活、自然、福祉、教育、文化などの幅広い領域にわたって、継続的に取り組む活動が対象です。助成内容は、「お金」「ひと」「もの」などから選べるようにしたいと考えています。

この基金の運用や助成先の決定は「海士まちづくり基金検討委員会（仮）」が担います。委員会は、海士町の現状を知る住民をはじめ、公益性を担保するための行政の代表者、公平性を担保するための外部の専門家などで組織する必要があります。また、住民を対象とした幸福度調査の実施なども考えています。

まずは基金を運営する委員会の立ち上げ、基金のしくみをつくる必要があります。それには、多くの住民の協力が必要です。この本を片手に、海士町で幸せに生きるための第一歩を一緒に踏み出しましょう。

参考文献
『第四次海士町総合振興計画 島の幸福論』 海士町発行